玉川大学 大学院

TAMAGAWA UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

■文学研究科 ■農学研究科 ■工学研究科 ■マネジメント研究科 ■教育学研究科 ■教職大学院 ■脳科学研究科



2027



Message

探究者としての使命

本学の教育理念である全人教育は、皆さんの中にある「真・善・美・聖・健・富」という6つの価値を調和的に伸長していくことを目的としています。本学の大学院にもまたこの全人教育を基盤として教育を展開しています。ここで、全人教育と大学院教育の関係性について少し詳しく説明したいと思います。

上述のとおり、全人教育は6つの価値を調和的に伸長することを主たる目的としています。そして、小原國芳はこの教育の考え方は普遍妥当なものであると主張しました。確かに学問、そして道徳や芸術の価値は古くから多くの人たちに大切にされてきました。宗教についても、たとえ特定の宗教や宗派を信仰せずとも、人間とそれを超越した存在との関係性をとおして人間の有限性を知り、謙虚さを忘れずにいるために必要なことと考えれば、その重要性は理解に難くないと思います。道徳規範としても必要でしょう。そして、人間が活動する上で心身が健康であることは何よりも大切です。さらに社会インフラなど安定した生活を支える基盤となる富の存在も、単なる個人の欲を満たす金銭的な豊かさとは異なり、その価値は広く認められているのではないでしょうか。

この全人教育が掲げる普遍的価値は、本学の教育理念として大学院教育を根底から支えています。大学院の授業や研究は大学とは異なり、より専門的な内容が多く、それゆえに皆さんの専門性が「深められる」ことになります。皆さんはこの専門性の高い教育、いわば個性を尊重した教育と普遍性を追求した全人教育、一見すると相反する教育のように思われる2つの教育とどのように向き合って研究を進めていけばよいのでしょうか。

小原國芳は、全人教育の核となる普遍性は、決して各人が有する個性の尊重を妨げないと考えました。むしろ、全人教育と個性尊重の教育は一物の両面と述べています。普遍性という土壌が整備されて、初めて皆さんの個性、つまり専門性の芽が開花するということです。さらに、小原國芳はたびたび「普遍即特殊」とも述べています。皆さんには大学院でのより深く専門分野の研究をとおして普遍的な真理を見いだし、さらなる専門分野の追究に生かせるような、「スペシャリスト」でありつつも、「普遍的な真理の探究者」としての姿勢を忘れずにいてもらいたいです。

学長　小原 一仁

玉川大学大学院３ポリシー

【目的】 玉川大学大学院学則第1条

本大学院は、玉川大学建学の精神に則り、学部教育の基礎の上に、学術の理論および応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展と人類福祉の増進に寄与することを目的としています。

【人材育成の目的】

修士課程では、専攻分野における研究能力またはこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を身に付けた人材を養成します。専門職学位課程では、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識および卓越した能力を身に付けた人材を養成します。博士課程後期では、研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を身に付けた人材を養成します。

【入学者受け入れの方針】 アドミッション・ポリシー

本大学院は、学士課程で学んだ専門領域を深め、さらに高い能力を備えた技術者や専門職、研究者を育成しています。このために、以下の能力や意欲を備えた人の入学を望みます。

1. 修士課程、専門職学位課程においては、学士課程で培った基礎能力をもとに、専攻分野において自ら探求する研究意欲のある人、および高度専門職に必要な知識・能力の修得を目指す人。このために、各研究科においては、学士課程における累積GPAまたは検定資格が一定以上であることを求めます。
2. 博士課程後期においては、修士課程で培った専門知識と研究能力をもとに、自立して独創的な研究に取り組む意欲と社会貢献に強い意志を持った人。

上記の能力や意欲を備えた人の入学試験は推薦入試（学内進学者のみ）、一般入試により実施します。試験の方法等は各研究科の入学者受け入れの方針や入学試験要項によります。

【教育課程編成の方針】 カリキュラム・ポリシー

本大学院は、学位授与の方針に基づき、以下のとおり教育課程を編成し実施します。

1. 修士課程、専門職学位課程においては、専攻分野における研究能力に加えて高度の専門職を担う能力を培うための体系的な教育課程を編成します。
2. 博士課程後期においては、修士課程で培った研究能力や専門的な能力をもとに、専攻分野についての自立的な研究を遂行する能力を身に付けるための教育課程を編成します。

研究科／専攻／研究分野・コース

文学研究科

- 人間学専攻（修士課程）
  思想文化研究　社会倫理研究　認知行動研究
- 英語教育専攻（修士課程）
  英語授業研究　応用言語学研究

農学研究科

- 資源生物学専攻（修士課程）
  植物微生物機能科学　動物昆虫機能科学
  生態地球環境科学　応用食品科学
  専修免許状（理科・農業）取得
- 資源生物学専攻（博士課程後期）
  植物微生物機能科学　動物昆虫機能科学
  生態地球環境科学　応用食品科学

工学研究科

- 機械工学専攻（修士課程）
  生産開発
- 電子情報工学専攻（修士課程）
  量子情報　システム情報学　ロボティクス
  情報セキュリティ
- システム科学専攻（博士課程後期）
  量子情報科学　知能情報科学　ロボティクス
  生産開発システム　環境エネルギー

マネジメント研究科

- マネジメント専攻（修士課程）
  グローバル・マーケティング研究　会計学研究
  グローバル・ツーリズム研究

教育学研究科

- 教育学専攻（修士課程）
  教育学研究　乳幼児教育研究
  教師教育学研究
- 教職専攻（専門職学位課程）［教職大学院］
  小学校教育　中学校教育　高等学校教育

脳科学研究科

- 心の科学専攻（修士課程）
  脳情報科学研究　神経科学研究　人間科学研究
- 脳科学専攻（博士課程後期）
  脳型計算論研究　脳・神経学際研究

【学位授与の方針】 ディプロマ・ポリシー

本大学院は、大学院の目的に則り、以下の要件を満たした者に修士または教職修士（専門職）および博士の学位を授与します。

1. 修士課程においては、各研究科・専攻所定の要件・単位修得を満たし、かつ修士論文または課題研究の審査および最終試験に合格した人に修士の学位を授与します。
2. 専門職学位課程においては、所定の要件・単位修得を満たした人に教職修士（専門職）の学位を授与します。
3. 博士課程においては、各研究科・専攻所定の要件・単位修得を満たし、かつ博士論文の審査および最終試験に合格した人に博士の学位を授与します。

「深い学びへの充実したサポート」

◆大学院学生学会発表・参加旅費助成

大学院学生学会発表・参加旅費助成とは、玉川大学大学院に在籍する学生が国内および国外の学会において自己の研究成果を公表することを奨励するため、その助成を行う制度です。また、文学研究科、マネジメント研究科、教育学研究科の在学生に対しては、国内の学会参加のみの場合でも、各研究科の事情に応じて助成を行います。助成回数は、国内・国外を問わず学生一人につき当該年度に1回とします。

◆ティーチング・アシスタント制度

玉川大学大学院では、大学院の学生に教育補助業務を行わせることにより、給与支給による経済的支援を行うとともに、教育研究の指導者となるための学修機会の提供および大学・大学院教育の充実を図るために、ティーチング・アシスタントを置いています。※教職大学院は除く

◆リサーチ・アシスタント制度

玉川大学大学院では、大学院の学生に研究補助業務を行わせることにより、給与支給による経済的支援を行うとともに、学術研究の推進に資する研究支援体制の充実・強化ならびに若手研究者の育成・確保を促進することを目的とし、リサーチ・アシスタント制度を設置しています。

◆大学院奨学金制度について

学業を進めるためには経済的負担が伴います。アルバイトなどで必要経費の一部をまかなうという方法もありますが、過度のアルバイトは、学業に支障をきたしかねません。そこで学業優先の視点から、必要な経費の一部を確保するための経済援助として奨学金制度があります。奨学金には給付（返還義務のないもの）と貸与（返還義務のあるもの）とがあり、それぞれ条件が設けられています。

学内奨学金（玉川大学大学院 全学生対象）

奨学金名	募集時期	対象学生（定数） 金額	主な条件	期間
大学院 奨学金	4月	修士課程・ 専門職学位課程（約40名） 年額20万円（給付）	学業的・人物的に 優れている者 （諸団体から学費を 一部または全額 支給されている 大学院生を除く）	採用年度
		博士課程後期（10名） 年額50万円（給付）		

このほかにも、日本学生支援機構の募集する大学院生を対象とした奨学金（貸与）などもあります。
詳しくは入学後、学生支援センターにお問い合わせください。



文学研究科

- 人間学専攻（修士課程）
- 英語教育専攻（修士課程）

知識基盤社会を支える
高度で知的な教養のある人材の養成

文学研究科は、教育研究を行うにあたって、玉川大学の全人教育の伝統と実績を踏まえ、高度な専門知識を修得し学問研究を発展させることを基本理念にし、高度で知的な教養のある人材の養成を図るために、人間学専攻と英語教育専攻を設置しています。文学研究科は、社会の要請に応じて、履修方法の弾力化を図り、他研究科開設科目の履修や地域社会との連携などを積極的に推進しています。また、大学院生専用の研究室、ティーチング・アシスタント制度、奨学金、学会発表・学会参加援助など、充実した教育環境を整えて学生の支援を行っています。さらに、玉川大学・大学院を卒業して教職に就かれている方々、また学部生との交流を図るために「玉川大学英語教育研究会（ELTama）」に参加することができます。



入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

文学研究科は、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な教養のある人材の育成を基本理念とし、高度職業人として社会に貢献する人材養成を教育目標にしています。

人間学専攻・英語教育専攻ともに、それぞれの研究に必要な基礎的知識・技能を修め、明確な研究内容と進路計画を持つ学生の受け入れを基本方針としています。

文学研究科の入学希望者はとりわけ以下の項目に応えられることを期待します。

1. 高等教育に必要な知識・技能を有し、それを活用できる能力を証明できること。
2. 修了後のキャリア目標について、明確に説明ができること。
3. 研究に必要な十分な英語力を有していること、またそれを証明できること。
4. 明確な研究計画を持ち、それを説明できること。
5. 研究を計画するために、自ら文献を探し、熟読し、批判的に読む能力を有し、それを証明できること。

人間学専攻（修士課程）

人間学専攻では、思想文化、社会倫理、認知行動を中心に、人間と現代社会の諸問題を人文科学的観点から研究します。そして、政治、経済、技術等が国際規模でめまぐるしく変動する社会と人間が直面している諸問題を人文科学的観点から分析し、論理力、判断力、倫理観、創造力を以て解決策を提案できる人材の育成を図ります。



英語教育専攻（修士課程）

英語教育専攻では、英語授業研究、応用言語学研究を中心に、英語教育にかかわる言語文化を専門的実践的に研究します。そして、高度な研究力、豊かな言語観、確かな指導力・実践力を培うことにより、英語教育や多文化教育の中核を担うことのできる人材を育成します。



詳細はホームページをご覧ください。https://www.tamagawa.jp/graduate/humanities/

文学研究科 人間学専攻（修士課程）の概要イメージ図

導入科目

- アカデミック・リテラシー（2単位）（必　修）
- ELF 500（2単位）（選　択）

専門科目

- 人間学研究（2単位）（必　修）
  - 思想文化研究（各2単位）
    - 思想文化研究
    - 思想文化演習
    - 西洋思想史研究
    - 表象文化研究
  - 社会倫理研究（各2単位）
    - 現代社会研究
    - 社会倫理学研究
    - 応用倫理学演習
    - 倫理思想史研究
    - 現代倫理学研究
  - 認知行動研究（各2単位）
    - 社会行動学研究
    - 認知行動演習
    - 認知論史研究
    - 人間行動学研究
    - ニューロエシックス研究

実践科目（選択）

- プレサービス・スタディーズA
  プレサービス・スタディーズB
  （各1単位）
- インターンシップⅠ
  インターンシップⅡ
  （各1単位）

研究科目（必修）

- 研究指導（人間学専攻）Ⅰ（2単位）
- 研究指導（人間学専攻）Ⅱ（2単位）

人間学専攻（修士課程）では、中学校教諭専修免許状（社会）・高等学校教諭専修免許状（公民）を取得※し、優れた資質をもつ教員をめざすことができます。

※取得希望免許状の基礎となる一種免許状を有していることが原則となります。

修了生Interview

イマジニア株式会社 モバイルコンテンツ事業部 勤務



文学研究科　人間学専攻（修士課程）
2015年3月修了
中山 政樹 さん

考え方や発想、研究手法…自分の中にある学びの蓄積が実践の場でもいきています。

大学院では哲学と理論社会学の研究を行っていました。一見すると実践的でない学問に思われがちですが、社会に出てからも通用する理論ばかりです。例えば、「物事の全体的な構造を理解し、体系化していく」という手法は哲学でよく用いられますが、サービスを設計するうえでも非常に役立ちます。また、事象や言説に対しても「どのようなことを論拠として揃えれば説明ができるのか」と発想することが、業務としてデータを取り扱う際に必要な考え方となります。

玉川大学の大学院は学ぶための環境が整っています。調べものをしたいと思えば、院生室のすぐそばに図書館があります。指導を仰ぎたいと思えば、教授も近くにいらっしゃいます。一時期、他大学の大学院に通った経験からも、このメリットは大きいと強く感じます。

今はゲームディレクターとして、新規タイトルの世界観設定やゲームのサイクル設計など、タイトルの根幹となる部分の構築を行っています。ゲームの世界でも哲学や思想史から着想を得ているものは多くあるため、実際に現場でそういった理論をエッセンスとしてどのように活用していけるのかということは常に考えています。

詳細はホームページをご覧ください。https://www.tamagawa.jp/graduate/humanities/

文学研究科 英語教育専攻（修士課程）の概要イメージ図

導入科目

- アカデミック・リテラシー（2単位）（必　修）
- 応用言語学研究（2単位）（必　修）
- ELF 500（2単位）（選　択）

専門科目

英語教育研究（2単位）（必　修）

英語授業研究（各2単位）
- 英語授業演習
- 入門期英語教育研究
- 英語教材論研究
- 英語教育総合
- 英語科アクション・リサーチ研究
- 言語評価・テスト論研究

関連科目（各2単位）
- 多文化社会研究
- 英語圏文学・文化研究

応用言語学研究（各2単位）
- 現代英語研究
- 言語獲得研究
- 言語使用研究
- 言語教育政策研究
- ELF研究
- 認知意味論研究

実践科目（選択）

- プレサービス・スタディーズA
  プレサービス・スタディーズB
  （各1単位）
- インターンシップⅠ
  インターンシップⅡ
  （各1単位）

研究科目（必修）

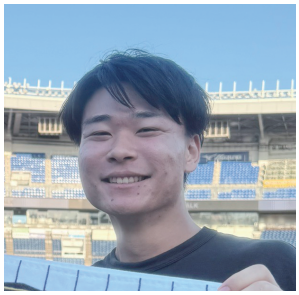
- 英語教育研究入門（2単位）
- 研究指導（英語教育専攻）Ⅰ（2単位）
- 研究指導（英語教育専攻）Ⅱ（2単位）

英語教育専攻（修士課程）では、中学校教諭専修免許状（英語）・高等学校教諭専修免許状（英語）を取得※し、優れた資質をもつ教員をめざすことができます。

※取得希望免許状の基礎となる一種免許状を有していることが原則となります。

修了生Interview

神奈川県立上溝南高等学校 勤務



文学研究科 英語教育専攻
2022年3月修了
岩﨑 要 さん

多くの先生と関わり、新たな視点を得られる環境です。

現在、高等学校の英語教員として「英語コミュニケーション」や「論理表現」の授業を受け持っています。また、2年生の担任や、校内の研究グループのメンバーとして「生徒自らが学ぶ意義を見出し、実生活や将来に学びを活かすことができる授業づくりを目指す組織的な授業改善」というテーマにも取り組んでいます。

大学院の研究指導では、私の考えに耳を傾け、理解してくださったうえで、新たな視点や考え方、参考にすべき文献などについて、常に的確なアドバイスをいただきました。行き詰まりそうになった際には、研究が前進する方向に導いてくださいました。指導教員だけでなく、ほかの先生方も親身になって相談に乗ってくださり、議論を重ねる中で、自分一人では気づけない視点を得ることもできました。多くの先生方から助言をいただける環境は、この研究科ならではの魅力です。

教員採用試験対策でも手厚い指導を受けました。特に二次試験の模擬授業に向けての準備では、「試験に合格するため」ではなく、「現場の教員として行うべき授業ができているか」を重視した指導を受け、発話や声量、立ち振る舞い、生徒の状況を把握する工夫まで細かく学びました。こうした経験が、現在の私の授業の基盤になっています。

▶人間学専攻



宇井 美代子 教授
博士（心理学）

専攻分野
社会心理学、ジェンダー

最新の研究テーマ
男女平等観・セクシズムや親密なパートナーとの間における暴力（Intimate Partner Violence; IPV）、人文社会科学研究者におけるジェンダーの実態に関する調査研究。

担当科目
アカデミック・リテラシー、社会行動学研究



中山 剛史 教授
博士（文学）

専攻分野
ヤスパース哲学を中心とする西洋哲学、倫理学

最新の研究テーマ
ヤスパースの哲学を〈訴えかけの倫理〉という視点から倫理的・倫理学的に解釈し、前期の〈実存倫理〉から後期の〈理性の倫理〉へと展開していった理路について究明する。

担当科目
西洋思想史研究、社会倫理学研究、ニューロエシックス研究



林 大悟 教授
博士（文学）

専攻分野
ウィトゲンシュタインを中心とした西洋近現代哲学、倫理学、応用倫理学

最新の研究テーマ
前期から中期を経て後期に至るウィトゲンシュタインの論理・倫理に関する思想を基本問題の一貫性という観点から考察。現代社会におけるリアルな問題を倫理学的な観点から考察。

担当科目
倫理思想史研究、現代倫理学研究、現代社会研究、応用倫理学演習



田中 綾乃 准教授
博士（人間文化科学）

専攻分野
カントを中心とした西洋近代哲学、美学、演劇論

最新の研究テーマ
カント『判断力批判』を主軸にしながら、直観と芸術に関する研究。生の促進としての舞台芸術についての研究。

担当科目
人間学研究、思想文化演習、表象文化研究

▶英語教育専攻



鈴木 彩子 教授
Ph.D.（教育学）

専攻分野
共通語としての英語（ELF）、社会言語学、言語教育、多文化教育

最新の研究テーマ
1）ELFを反映した英語教育の構築
2）ELFのための教師教育
3）地球市民育成とELF

担当科目
多文化社会論、ELF研究



丹治 めぐみ 教授
文学修士

専攻分野
アメリカ文学、アメリカ文化研究

最新の研究テーマ
1）アメリカ女性作家研究（Anne Tyler と Elizabeth Strout作品における家族像）
2）英語教育における文学的素材の活用

担当科目
英語圏文学・文化研究



松本 博文 教授
文学士

専攻分野
言語獲得論、英文法論、言語景観論

最新の研究テーマ
1）第二言語獲得と留学
2）教育英文法および英文法教育
3）英文読解支援
4）英語・日本語を中心とした言語景観

担当科目
現代英語研究、言語獲得研究



森本 俊 教授
博士（学術）

専攻分野
英語教育学、第二言語習得論、認知意味論

最新の研究テーマ
1）英語の「学び方」と自律的な学習者の育成
2）英語教員育成
3）認知意味論に基づいた文法・語彙指導

担当科目
英語教育研究、英語授業演習、認知意味論研究



村越 亮治 准教授
博士（学術）

専攻分野
英語教育学、授業デザイン、授業改善、アクション・リサーチ、教育評価

最新の研究テーマ
1）アクション・リサーチによる授業改善の効果（データ分析と質的調査）
2）統計学的データ分析手法の学校現場への応用

担当科目
英語科アクションリサーチ研究、言語評価・テスト論研究、英語教育総合



農学研究科

- 資源生物学専攻（修士課程）
- 資源生物学専攻（博士課程後期）

いまだ未利用の生物資源や新しい機能の開発・応用ができる研究者、技術者の養成

農学研究科は、1977年に修士課程、1979年には博士課程が設置され、40年の歴史をもっています。資源生物学一専攻の小さな所帯ながらも、植物微生物機能科学、動物昆虫機能科学、生態地球環境科学、応用食品科学の4研究分野と専修免許状（理科・農業）取得コースを擁し、その教育研究の目的を、生物の諸機能を生物学的および化学的に解明し、資源生物として改善、生産性の向上を図ることとし、いまだ未利用の生物資源や新しい機能の開発・応用ができる研究者、技術者の養成をめざしています。また、農学のフィールドはヒトと生命、そして地球環境という壮大なテーマに開かれているとの認識に立ち、生命、健康、食糧、エネルギー問題など山積する課題の解決者、またその際、生物資源と環境動態の知識に裏打ちされた「地球共生系」の考えを重視、リサイクルや地球環境の保全に配慮し、先進のバイオテクノロジーに対しても、倫理観のある人材の育成に努めています。



専修免許状（理科・農業）
取得コース

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

農学研究科では、私たちの食料や生活の資源としての生物、生命現象に深く興味を持ち、大学院で学んだ知識と技能を社会に還元する意欲を持った学生の入学を望みます。修士課程では学士課程で修得した知識と技能を基盤として、博士課程後期においては、修士課程で身に付けた高度な専門性を活かした主体的な研究姿勢と飽くなき探求心を継続できる態度が求められます。

■修士課程

専門知識や外国語（英語）を含む理科系大学卒業レベルの学士力を有し、かつ知的好奇心が旺盛で、研究意欲にあふれる学生を望みます。教育職員専修免許状（理科あるいは農業）取得をめざす学生も歓迎します。

■博士課程後期

理系の修士課程修了相当の専門知識と実験技能ならびに対象研究分野の英語による学術論文を理解する能力を有していることを求めます。研究者または高度専門技術者として、新しい分野の研究開発に自立して取り組む意欲と態度を備え、国際社会での活躍を夢見る人材を望みます。

入学者選抜に関する評価基準

修士課程、博士課程後期ともに、玉川大学大学院【人材養成等教育研究に係る目的】に記述した目的に合致する人材を、以下の方法と基準で選抜します。

入学者選抜方法

1. 入学試験は次のいずれかの方法により実施します。
   （1）学内推薦入試（成績基準があります）
   （2）一般入試
2. 入学者選抜の評価項目は原則的に以下によります。評価基準については、理系の学士学位相当（修士課程）、理系の修士学位取得相当（博士課程後期）の学力と入学を希望する研究分野の専門知識の修得状況によります。
   （1）学内推薦入試
      1）書類審査（主に、知識・技能等を評価）
      2）面接（主に、主体性、協働的態度、表現・説明力等を評価）
   （2）一般入試
      1）書類審査（主に、知識・技能等を評価）
      2）学力試験（主に、英語力、思考力、専門知識等を評価）
      3）面接・口頭試問（主に、主体性、協働的態度、表現・説明力等を評価）

修了生Interview　株式会社エコー 勤務



農学研究科 資源生物学専攻
2026年3月修了
吉田 有輝 さん

実践的な環境で研究を深め、新たな挑戦への一歩を。

大学院では、QGIS（地理情報システムソフトウエア）を用いたデータ解析や、ドローンを活用した調査に取り組んでいました。調査で得た情報を整理・可視化しながら状況を把握する経験を重ねたことで、現場を見る力とデータ解析力が身につきました。現在の業務でも、環境調査で得たデータや映像を正確に整理し、必要な情報を読み取る力が求められており、大学院で培った力が大いに役立っています。

特に印象に残っているのは、先生方に勧めていただき、国際学会で発表した経験です。英語に苦手意識があったため大きな挑戦でしたが、先生方の後押しもあり一歩踏み出すことができました。現地では発表だけでなく、海外の文化にも触れ、自分の視野や考え方が大きく広がったと感じています。

現在は、建設コンサルタント会社で環境調査に携わり、主に水中ドローンを用いた調査を担当しています。水中の地形や底質、生物の生息状況などを確認し、得られた映像やデータを整理・解析するほか、サンゴの保全・保護を目的とした種苗生産にも取り組んでいます。地域の自然環境を守ることにつながる仕事に、大きなやりがいを感じています。今後も現場で経験と知識を積み重ねながら専門性を高め、将来的には技術士や港湾海洋調査士の資格取得をめざしています。

詳細はホームページをご覧ください。https://www.tamagawa.jp/graduate/agriculture/

資源生物学専攻（修士課程・博士課程後期）



資源生物学に立脚して生物生産を向上させ、生産物の利用を通じて生活を豊かにし、自然との調和をもとに、未来に向けた資源の開発・利用のための研究を行っています。加えて、本大学に設置されている学術研究所、脳科学研究所、フューチャー・サイテック・ラボとの連携も図っています。また、研究者養成だけでなく、アグリビジネスを中心とした広い分野で活かせる高度な研究開発能力の育成をめざしています。

農学研究科 資源生物学専攻（修士課程）の概要イメージ図

必修科目

- 科学英語表現（2単位）
- 資源生物学演習Ⅰ・Ⅱ（各2単位）
- 資源生物学研究Ⅰ・Ⅱ（各5単位）
- 資源生物学課題研究Ⅰ・Ⅱ（各2単位）★

選択科目

植物微生物機能科学分野（各2単位）
- 植物遺伝学
- 植物細胞分子科学
- 植物病学
- 植物病原学
- 微生物利用学
- 園芸植物機能論

動物昆虫機能科学分野（各2単位）
- 細胞情報伝達論
- 遺伝子発現制御論
- 生体防御論
- 動物発生学
- 発生工学
- 動物細胞機能学
- 昆虫生理学
- ミツバチ科学
- 昆虫行動生理学
- ソシオバイオロジー
- 発達科学基礎論

生態地球環境科学分野（各2単位）
- 環境動態保全学
- 環境情報解析
- 環境微生物学
- 行動生態学
- 環境生態学
- 植物生理生態学

応用食品科学分野（各2単位）
- 食品製造学
- 応用バイオインフォマティクス
- 食料科学論
- 応用食品栄養学
- 植物分子生理・生化学
- 植物環境制御学
- 機能性食品科学

大学院共通科目（各2単位）
- 全人教育研究
- 統計
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践A
- 研究者倫理
- ELF 500
- IB教師教育 各種
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践B
- Research Presentation
- 多様化社会の中でのSTEM

教職科目〈専修免許状（理科・農業）取得コースのみ必修〉

- 教育内容・方法学研究（2単位）
- 教育制度学研究（2単位）
- 教育実践学研究（2単位）

4つの研究分野

植物微生物機能科学分野

植物生産のもととなる植物機能の開発や遺伝資源の保全について、遺伝子工学、園芸植物学、植物病理学、植物生理学などのさまざまな分野から追究しています。また、微生物が生産する生理活性物質を有効利用し、社会に貢献する研究を推進しています。具体的には、感染症の問題を解決する医薬や自然にやさしい農薬開発をめざし、研究を進めています。

動物昆虫機能科学分野

高度な社会を作っているミツバチ、マルハナバチ、スズメバチの情報伝達のしくみや、記憶・学習能力などを解析するとともに、それらをヒトの社会にも応用する研究も展開しています。また、カエルやイモリなどの両生類を研究材料にして動物の体づくりの謎解きにも取り組んでいます。

生態地球環境科学分野

生態系（エコシステム）の健全性を復元・維持し、持続可能な利用に資することを目的に、農耕地・自然生態系（森林、草原、水辺）、さらに高山・極地という特異環境なども視野に入れ、環境と生物のつながりという観点から研究しています。

応用食品科学分野

食品の質的向上、疾病予防に効果が上がる食品の開発、食品加工で生じる副産物の有効利用のために、豆類および乳類等の食品素材が本来もっている有効成分の栄養生理学的機能に関するさまざまな研究を行っています。

教員紹介

★……修士課程の研究指導資格を有する教員　★★……修士課程・博士課程後期の研究指導資格を有する教員

▶ 植物微生物機能科学分野



肥塚 信也 教授

博士（農学）★★

高等植物の示す様々な形質を、遺伝学・植物生理学・生化学の手法を用いて解明することを目的としている。特に、アブラナ科作物の育種上重要な形質については、核とオルガネラゲノムにゲノム編集技術による標的変異の導入を利用した分子育種の可能性を検証している。また、コスモスの花色発現に関する遺伝子の同定やその制御機構を明らかにすることも目標としている。



渡辺 京子 教授

農学博士★★

植物病害のメカニズムを病原体と植物の相互作用から国際技術協力、国際共同研究として世界で問題になっている熱帯果樹バナナとカカオの病害と、国内共同研究により我国で問題になっているビワの病害の防除を目指している。これらの病原体の同定を含む診断と疫学的なアプローチから防除方法を目指す。様々な基礎研究からヒントを得て、実学的なアプローチを試みることで持続可能な生産技術体系の確立を行う。



浅田 真一 教授

博士（農学）★

日本では様々な果樹、果菜類が世界的に見ても非常に高レベルな技術に基づいて栽培されている。この分野ではこのような果樹、果菜類の栽培技術を理論的に理解するとともに、それぞれの成育を診断するための技術に繋げる研究に取り組む。特にポリネーションについて、植物側、ポリネーター側のそれぞれの生理を理解し、より効率的な技術に繋げるため応用的な視点からの研究に取り組む。



石崎 孝之 教授

博士（理学）★

菌類は、地球上に150万種が棲息すると推定されているが、約10万種しか報告されていない未解明な生物群である。また菌類には、落ち葉や枝を分解する働きを持つものだけでなく、動植物に対する寄生・共生関係にあるものも数多く知られている。当研究室では、菌類の中でも「きのこ」の未利用遺伝資源を機能開発することを目指して、分子生物学的、生化学的なアプローチにより樹木病害防除に関わる生理活性物質の解析、有用遺伝子の発現解析、栽培条件の検討などの研究に取り組んでいる。

▶ 動物昆虫機能科学分野



有泉 高史 教授

博士（理学）★★

カエルやイモリなどの両生類を実験材料にして、動物の体づくりの仕組みを研究している。動物の体が形づくられる発生の過程では、誘導と細胞分化という生物現象が重要な役割を果たしている。両生類の胚には“アニマルキャップ”と呼ばれるさまざまな種類の細胞に分化できる部分がある。アニマルキャップを胚から切り出して誘導物質で処理する実験系を基に、筋肉や神経などの組織、心臓や膵臓などの器官がどのようにして分化するのかを研究している。さらに、頭部・胴部・尾部といった体の基本構造が作られる仕組みを明らかにして、試験管の中でオタマジャクシを作り出す研究も続けている。一方、両生類の発生とその仕組みを中学生や高校生にわかり易く伝えるための魅力的なデジタル教材（動画や3Dモデル）とアナログ教材（樹脂標本や立体模型）の開発にも取り組んでいる。



佐々木 謙 教授

博士（農学）★★

社会性昆虫（ハチ類やアリ類）で見られる行動様式の多型やその転換を引き起こす神経・内分泌機構、またそれ以外の昆虫の行動の切替えに関わる神経機構を明らかにすることをめざしている。そのために行動レベルの解析から、脳内物質（特に生体アミン類）の分析、神経活動の電気生理学的解析、分子生物学的手法を用いた生理活性物質の合成酵素や受容体の発現の解析を行っている。社会性昆虫においては、社会性の程度の異なる種を用いて、繁殖の調節に関わるドーパミンの様々な作用や幼若ホルモンとの関係の違いを明らかにし、繁殖分業の起源を追究している。

▶ 生態地球環境科学分野



南 佳典 教授

博士（学術）★★

陸上生態系の維持機構には様々な要素があるが、その中に“撹乱”という要素が含まれる。一見安定しているように見える極相林であっても、その内部ではモザイク状に撹乱が起こっており様々な更新フェーズがみられる。撹乱には自然に引き起こされるものと人為的なものがあり、それぞれ頻度・程度が異なるため、撹乱後の生態系の回復もそれぞれに応じて多様である。このような撹乱動態を主テーマとし、日本の山岳域や北極域、シベリアで研究を行ってきた。現在は、カナダ西海岸に広がる温帯降雨林や、北海道東部の森林で生態系の保全を意識し、各生物要素と物理環境との相互作用に着目して研究を行っている。



小林 祥子 教授

博士（学術）★

地球観測衛星データの解析を通じ、広範囲の農地や森林の動態を把握する研究を展開している。現在は、生物多様性に関わる森林の下層植生の変化や、収穫適期推定を目指した水稲の生育モニタリングを主な研究テーマとし、特に、天候に左右されることなく地表面を観測可能な「マイクロ波衛星データ」の解析に取り組んでいる。マイクロ波は人間の目には見えない波長であり、画像判読が非常に煩雑である。そのため、地上観測データと衛星観測データを付き合わせて解析し、植生（生物物理学的パラメータ）がマイクロ波の散乱に影響するメカニズムを理解することで、農地や森林の状態と変化を的確に捉えることを目標としている。



関川 清広 教授

博士（農学）★

生態系は、生物群集（生産者、消費者、分解者）と環境要因とから成り、これらは相互に作用し、また時空間的に変動・不均一性がある。森林、草原、荒原、農地などの陸上生態系において、生産者（植物）を対象に、機能（光合成、光合成の結果としての成長や繁殖）、個体群動態、群集（植生）の組成や構造、フェノロジー（季節的な生物現象）、それらの時空間変動を通して、生態系の機能解析（バイオマス、一次生産、炭素循環）、人間の影響評価、希少植物の保全に関する研究を行っている。野外調査、生物モニタリング、植物種の同定、植物体や生理機能の測定・分析、環境測定・分析、データ解析などの技術を修得しながら、研究に取り組む。



上原 歩 教授

博士（学術）★

行動が制限される植物は、各環境で生存するため、生育環境に由来するストレスに対する防御や、他個体・他種とのコミュニケーションが求められる。植物がとる生存戦略の一つにフラボノイドを含む二次代謝産物の合成が知られている。フラボノイドの仲間は苔類以上の植物に広く分布し、これまでに8,000種類以上が報告されている。当研究室では植物化学および植物生理生態学的な観点から、植物中のフラボノイドを定性し、これらの植物中での機能の解明を目指している。また、フラボノイドは機能性成分や、色味として人に利用されることから、農産物の品質向上など、農業分野への貢献も目指している。



關 義和 教授

博士（農学）★

近年、人間活動の拡大にともない生物多様性が世界各地で失われつつある。一方では、増え過ぎて生態系や人間生活などに深刻な影響を及ぼしている野生動物も存在する。こうした問題を解決していくためには、野生動物の生態や行動を理解するだけではなく、人間活動と野生動物の関係などを含めて、多様な視点から研究を進める必要がある。また、動物は1種だけで生きている訳ではなく多様な種と関係を持って生きている。そのため、自然や生き物たちの保全を進めるためには、種間の相互作用についても深い理解が求められる。こうした視点から、哺乳類を中心としつつ、鳥類や爬虫類、昆虫類、ミミズ類、マダニ類など多様な動物種を対象に、生態学や保全学的な研究を展開している。



友常 満利 准教授

博士（理学）★

「生態系」とは生産者・消費者・分解者などの様々な生物群集を含む系であり、まるで一つの生き物のように機能し（生態系サービス）私達に恩恵をもたらす。当研究室では、生態系生態学を専門分野とし、①様々な生態系の構造と機能を明らかにするとともに、それらが②自然または人為由来の攪乱によってどのように変化するのかを明らかにすることを目的としている。生態系内の生物群集や環境との関係は、コンパートメントモデルを基礎にした物質の循環、特に炭素の循環を明らかにすることが重要となる。自然の中に身を置くフィールドワークを大切にしながら、植物生態学、土壌学、さらには理工学的な知見、最新技術も取り入れ研究を進めている。近年では、地球温暖化の解決の糸口となり得るバイオ炭を使った生態系への炭素隔離についての研究に力を入れている。



原野 健一 教授
博士（農学）★★

ハナバチが示すさまざまな行動の意義と、それを可能にするメカニズムに関心を持って研究に取り組んでいる。特に近年は、ミツバチの採餌蜂が活動エネルギー源(燃料)として巣から持ち出す蜜の調節に注目している。これまでの研究により、ミツバチは餌場までの距離や餌場に関する情報量、狙う餌の種類などによって、持ち出す燃料蜜の量と濃度を変えていることを明らかにしてきた。この調節によって、燃料の運搬量を抑えて飛翔への負担を減らし、かつ採餌中の燃料切れも回避している可能性について検証している。ミツバチ以外にも、マルハナバチ、クマバチ、ヒメハナバチ、ツツハナバチなど野生のハナバチの生態にも関心があり、行動観察を軸にした研究を進めている。著書『ミツバチの世界へ旅する(2017)』



宮崎 智史 教授
博士（環境科学）★★

生物の形態や行動様式はいかにして多様な進化を遂げたのか。特定の形質の獲得が生物の多様化をどのように促進したのか。それらの仕組みに迫るため、アリなどの昆虫を対象とした生態進化発生学的研究を展開する。14,000もの種を擁するアリ科(Formicidae)の多様化には「蟄居型創設」というアリに特有の繁殖戦略の獲得が重要だったと考え、その「蟄居型創設」の至近機構の解明に力を入れている。また、アリの社会を構成する女王とワーカーは同じゲノムをもちながら、その表現型は著しく異なる。この表現型分化の分子基盤を明らかにするとともに、特定の個体群で新奇の女王表現型が出現する種を対象とし、表現型進化を司る責任遺伝子の探索も行っている。組織形態学、行動生態学、発生学、分子生物学、トランスクリプトーム、プロテオーム等、様々な研究アプローチを駆使し、上記の進化機構の解明に挑んでいる。



佐々木 哲彦 教授
博士（理学）★

高度に発達した社会生活を営む代表的な真社会性昆虫であるミツバチを材料に、その進化発生学的な研究を進めている。ミツバチの雌は幼虫期に与えられる餌の違いによって、女王バチと働きバチという形態的・機能的に異なる二つのカーストに分化する。女王バチは産卵行動に専念し、働きバチは若いうちは幼虫の世話などを行い、老齢になると巣外での採餌活動を担当するようになる。このようなカースト分化や、働きバチの齢差分業など、ミツバチの社会性に深く関わる現象の分子基盤を明らかにすることをめざし、DNAメチル化などのエピジェネティックな制御機構に注目して、分子生物学的手法による研究を行っている。また、ミツバチ科学研究センターに蓄積された飼育技術を駆使しながら、ミツバチの遺伝的改変に向けたゲノム編集にも取り組んでいる。



佐治 量哉 教授
博士（工学）★

大きな脳を持つ私たち人間は毎日眠ることを必要としている。私たちはなぜ眠るのか、なぜ眠らなければならないのか、さらにはいつから・どのように眠っているのか。私たち人間の「睡眠」と「その発達に関わる諸問題」を脳波・自律神経活動など様々な生体データの計測と分析を通して明らかにする。一方、理科の専修免許状の取得を目指す学生らと、人間の赤ちゃん・子どもの学習や認知、運動の「なぜ」について、大型霊長類、あるいは哺乳類といった生物学的な視点から切り込み、理解していく発達科学研究にも取り組んでいる。



佐藤 一臣 教授
博士（農学）★

生物は日常的に紫外線、化学物質などの外的ストレスにさらされており、個体維持のためにプログラム細胞死、メラニン生成などの防御システムを備えている。主に哺乳動物細胞、魚類モデル生物を利用し、ストレスが細胞内の生理活性、発生におよぼす影響を遺伝子発現、細胞内シグナル伝達系に着目して解明を試みている。また、基礎的な研究から得られた知見を活かしメラニン生成制御剤、腫瘍抑制物質、細胞保護効果を有する物質の探索および作用メカニズムの解明にも取り組んでいる。



原本 悦和 教授
博士（学術）★

受精卵から分裂して生じた細胞は、同一の遺伝情報を持ちながらも、発生の過程において多様な機能を獲得し、異なる組織や器官へと分化する。その背景には、細胞間の相互作用や細胞内のシグナル伝達を介して、遺伝子発現が時間的および空間的に巧みに制御される仕組みが存在する。分子生物学や遺伝子工学の手法を用いて、これらの分化メカニズムの解明に取り組んでいる。研究には、脊椎動物の発生モデルとして広く利用されているカエルやイモリなどの両生類、ならびに培養細胞を用いている。なかでもイモリは、複雑な組織を再生する優れた能力を持ち、再生メカニズムの解明に極めて有用なモデル生物である。再生に関与する細胞や遺伝子の役割を明らかにすることを目指している。



吉村 英翔 講師
博士（学術）★

昆虫は光周期などの環境シグナルを受容し，遺伝子発現・生理・行動・社会構造を柔軟に変化させる．この環境応答メカニズムと社会性進化との関係についてカリバチを対象に明らかとすることを目指し研究を進めている．なかでも，アシナガバチ類は外的影響を受けやすい巣構造をもちながら熱帯から亜寒帯まで広く分布し，環境に応じて社会を柔軟に維持する点で興味深い．現在は，日本産アシナガバチ類の遺伝子発現解析，生化学分析，行動や巣構造解析を組み合わせ，個体レベルのカースト分化や営巣様式と環境要因の関係を明らかにし，環境適応と社会性進化を地理的スケールで理解する基盤構築に取り組んでいる．

▶ 応用食品科学分野



吉村 義隆 教授
博士（理学）★★

食用キノコであるタモギタケには、エルゴチオネイン(EGT)という抗酸化物質が多く含まれている。EGTは、主要な臓器に長期間にわたって蓄積し、活性酸素の害を防ぐ効果があるなど、他の抗酸化物質にはない性質があり、医薬品やサプリメントへの応用が期待されている。生産量の高い菌株の探索や、栽培法を研究することによって、EGT含有量の高いタモギタケの開発を行っている。また、地球外(特に火星)での生命を探査するために、土中の微生物や有機物を、鉱物粒子と区別して検出する技術の開発や、小型の蛍光顕微鏡装置などの開発も行っている。



大橋 敬子 教授
博士（農学）★

環境変動下における光合成の順化について生理・生化学的な手法を用いて研究を行っている。現在は光質（光の波長組成）の変動に着目しており、発光ダイオードなどの特殊な光源を用いた栽培を行い、葉の光合成関連酵素・タンパク質や色素の変化について解析している。光質変動は、葉の展開や花芽形成にも影響を及ぼしており、それらの反応の分子機構を探る研究も始めている。これらの研究で得られた知見をもとに、植物工場の生産性を高める技術や、栄養価や機能性を強化した“高機能野菜”を生み出すための先端的な生産技術の開発を進めている。



冨田 信一 教授
博士（農学） ★

食と健康との関係は、きわめて身近な問題である。食品のもつ生体調節機能として、健康の維持・増進に寄与するような様々な成分を見出し、その作用機構について検討している。具体的な研究として、「母乳の生理活性物質（ラクトフェリン、ポリアミンなど）の機能性」、「乳酸菌、ビフィズス菌の保健効果」、「線虫を用いた抗老化因子の探索」、「食品中の抗アメーバ因子の探索」、「授乳婦の食事内容と母乳成分の関係」、「発酵による新規機能性の発現」などに取り組んでいる。



原 百合恵 准教授
博士（学術）★

人々の健康増進や疾病予防に貢献することを目標に、栄養素の代謝機構や生理的作用の面から食品の機能性とその分子メカニズムを探索している。現在は、2型糖尿病の薬物療法と運動療法の効果を高める研究を進めている。具体的には、糖尿病治療薬メトホルミンの効果を増強または減弱する食品成分や、運動時の疲労感を軽減する食品成分として、クエン酸などの中間代謝物を摂取したときのエネルギー代謝の変化に着目し、糖尿病の治療効果の向上を目指している。



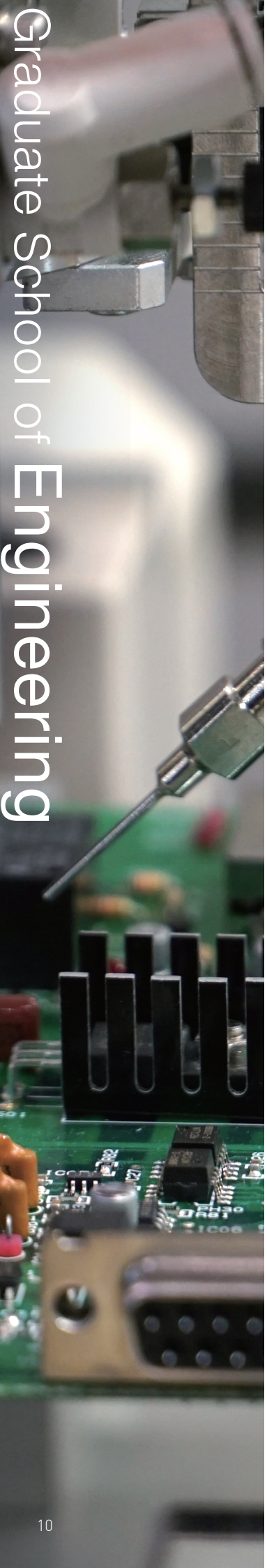
大賀 浩史 講師
博士（農学）★

水産有用魚種の性成熟制御機構の解明を目的とし、マサバ、マアジ、マイワシなどの多獲性浮魚類を対象に研究を行っている。学内の閉鎖循環式陸上養殖システム（RAS）を基盤として、精密かつ再現性の高い飼育実験系を構築し、脳－脳下垂体－生殖腺軸（BPG-axis）を中心とした生殖関連因子の解析を進めている。特に初回成熟開始に関与する内分泌因子に着目し、分子・組織・個体レベルを横断した解析により、性成熟開始機構の理解と養殖への応用を目指している。



李 潤珠 講師
博士（海洋科学）★

食品の品質保持と加工プロセス最適化をキーワードとした研究を行っている。食品は様々な成分を含め、複雑な構造を持つ複合的なものであり、収穫から加工、流通、保蔵という一連の過程において、その成分の物理化学的な変化により品質が左右される。食品の基本的な単位操作である粉砕と冷凍を中心に農産物の一次加工や長期保存において、物理化学的な手法を用いて食品の成分と構造に着目した品質変化のメカニズムの解明を行っている。



Graduate School of Engineering

工学研究科

◆機械工学専攻（修士課程）　◆電子情報工学専攻（修士課程）
◆システム科学専攻（博士課程後期）

最先端の科学と技術を探究しながら地球規模で活躍する人材を育成

工学研究科は、修士課程の2専攻と博士課程後期の1専攻を通じて工学に関する教育研究活動を展開しています。修士課程には機械工学専攻と電子情報工学専攻があります。機械工学専攻では材料加工システム分野、環境エネルギー分野、経営システム分野からなる生産開発コースを、電子情報工学専攻では、量子情報コース、システム情報学コース、ロボティクスコース、情報セキュリティコースを提供しています。修士課程を修了すると、「修士（工学）」の学位が授与されます。
博士課程後期では、修士課程の教育研究分野をさらに高度化したシステム科学専攻があります。主な研究分野として、量子情報科学、知能情報科学、ロボティクス、生産開発システム、環境エネルギーがあります。博士課程後期を修了すると「博士（工学）」の学位が授与されます。

機械工学専攻（修士課程）
電子情報工学専攻（修士課程）
→ システム科学専攻（博士課程後期）

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

工学研究科は、工学的視点から人類の課題に取り組み、知識基盤社会の発展に貢献する意欲を持つ学生を求めています。
修士課程では、本研究科での高度な学修・研究に必要な基礎知識と技能を学士課程で修得していることが求められます。特に、学士課程で学んだ数学の内容を正確に理解し、専門分野へ応用する能力が必要です。また、問題解決において重要となる日本語および英語の基礎的なコミュニケーション能力も重視されます。
工学研究科修士課程では、教育職員専修免許状（数学または工業）の取得を目指すことも可能です。その場合、研究で得た高度な知識・技術を教育現場に還元しようとする意欲が求められます。
博士課程後期では、未解明の知見・技術・考え方を開拓する研究が行われます。そのため、専門知識に基づき主体的に研究を進め、独創的な成果を生み出す気概が求められます。また、研究は新規性や有用性が認められるオリジナル論文として発表されることで初めて意義を持ちます。このため、論文執筆に必要な論理力、文章力、語学力も不可欠です。

修了生Interview　テルモ株式会社 インターベンショナルシステムズ事業 技術部 生産技術課 勤務

研究も仕事も、話し合いを重ねることが結果につながります。



工学研究科
機械工学専攻（修士課程）
2024年3月修了
増田 ひびか さん

現在、医療機器メーカーで安定的かつ効率的な生産工程を考える仕事に就いています。生産設備の部品や治具の考案、発注、サンプル製作・評価による生産条件の検討が主な業務です。社内外へ部品製作を依頼する際に大切なのは、何度も話し合い、最適な加工方法の発見やコストダウンにつなげること。大学院でも、研究に必要な部品製作の際、素材や寸法について研究指導教員や技術指導員の方々と話し合いを重ね、要求性能を満たす部品を製作していました。しっかりと話し合いを行うことで、思いがけない気づきを得られたり、トラブルの際にもすぐにリカバリーできたりするものです。大学院での経験や学びが仕事に活きていると感じます。

また、学生と先生方との距離が近く、どの先生も親身になって接してくださいました。研究指導教員ではない先生に時間を取っていただき、アドバイスを受けたこともあります。進路について、何人もの先生が相談に乗ってくださり、本当に心強かったです。就職活動では、キャリアセンターの方々のサポートも大きな力になりました。私の学業成績や研究内容を聞いた上で的確なアドバイスをしてくださり、今の仕事へとつながっています。

今は、担当している製品の技術者スペシャリストを目指しています。特に必要性を感じる品質管理、統計学、電気、英語については個別に勉強を進めており、資格取得も目標の一つです。

機械工学専攻（修士課程）

主に機械工学系および経営工学系の学部卒業生を対象に、高度な研究・開発能力を育成することを目的としています。研究領域には、材料加工システム・環境エネルギー・経営システムの３分野を設定し、時代のニーズにマッチした新しい分野の開拓にも挑戦しています。また、企業との有機的な連携に基づく共同研究を積極的に推進しています。

教員免許に関しては、取得希望の専修免許の基礎となる一種免許状を有していれば（取得見込みの者を含む）、中学校教諭専修免許状（数学）※、高等学校教諭専修免許状（数学）※、中学校教諭専修免許状（技術）※、高等学校教諭専修免許状（工業）を取得できます。

※教職課程認定申請中
ただし、文部科学省における審査の結果、予定している教職課程の開設時期が変更となる可能性があります

機械工学 専門科目（選択）

生産開発コース

材料加工システム分野（各2単位）
- 機械材料工学通論
- 工業材料学通論
- 材料物性学
- 材料加工学通論
- バイオメカニクス

環境エネルギー分野（各2単位）
- リニューアブルエネルギー
- 熱エネルギー
- 超伝導工学

経営システム分野（各2単位）
- 新製品開発システム
- 応用人間工学
- コスト・マネジメント論
- 数的情報分析論
- 安全衛生工学

工学共通院科目・特別講義（2単位、特別講義は1単位）
- 幾何学通論
- 解析学通論
- 関数方程式通論
- 基礎数学通論
- 数理計画通論
- 人工知能の数理
- 知的財産と技術者倫理
- 科学英語表現
- 統計物理
- 物性物理学
- 多様化社会の中でのSTEM
- インターンシップ
- 生産開発特別講義A
- 生産開発特別講義B

工学演習・研究（各2単位）
- ◆ 機械工学演習A
- ◆ 機械工学演習B
- ○ 機械工学研究Ⅰ
- ○ 機械工学研究Ⅱ
- ◆ 機械工学演習（工学専修）A
- ◆ 機械工学演習（工学専修）B

○:必修科目
◆:必修選択科目

大学院共通（各2単位）
- 全人教育研究
- ELF 500
- 統計
- IB教師教育 各種
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践A
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践B
- 研究者倫理
- Research Presentation

修　士　論　文

電子情報工学専攻（修士課程）

主に電子工学系、情報通信工学系の学部卒業者を対象としながらも、学際的な研究を積極的に進めているため、異分野への挑戦をめざす多くの人々に門戸を開放しています。量子情報、システム情報学、ロボティクス、情報セキュリティのコースを設け、多彩な研究を積極的に推進しています。教員免許に関しては、取得希望の専修免許の基礎となる一種免許状を有していれば（取得見込みの者を含む）、中学校教諭専修免許状（数学）、高等学校教諭専修免許状（数学）、高等学校教諭専修免許状（情報）※、高等学校教諭専修免許状（工業）を取得できます。

※教職課程認定申請中
ただし、文部科学省による審査の結果、予定している教職課程の開設時期が変更となる可能性があります

電子情報工学 専門科目（選択）

量子情報コース（各2単位）
- 量子力学
- 量子通信と量子暗号
- 光エレクトロニクス
- 量子コンピュータ基礎
- 量子情報数理
- 光通信ネットワーク
- 量子確率過程

システム情報学コース（各2単位）
- ディジタル通信システム
- マルチメディアシステム
- ダイナミカルシステム
- 神経情報処理
- システムシミュレーション工学
- インタラクティブシステム
- 応用確率論
- 最適化理論
- 多目的最適化
- 視覚情報処理
- 数的情報分析論
- 人工知能情報学

ロボティクスコース（各2単位）
- ロボットシステム
- 先端メカトロニクス
- システム制御工学
- 知能システム論
- ニューロコンピュータ
- ファジィシステム論

情報セキュリティコース（各2単位）
- 情報セキュリティ概論
- 情報セキュリティ対策
- 情報セキュリティマネジメント論
- 量子通信と量子暗号
- 暗号と符号理論

工学共通院科目・特別講義（2単位、特別講義は1単位）
- 幾何学通論
- 解析学通論
- 関数方程式通論
- 基礎数学通論
- 数理計画通論
- 人工知能の数理
- 知的財産と技術者倫理
- 科学英語表現
- 統計物理
- 物性物理学
- 多様化社会の中でのSTEM
- インターンシップ
- 電子情報工学特別講義A／B

工学演習・研究（各2単位）
- ◆ 電子情報工学演習A
- ◆ 電子情報工学演習B
- ○ 電子情報工学研究Ⅰ
- ○ 電子情報工学研究Ⅱ
- ◆ 電子情報工学演習（数学専修）A
- ◆ 電子情報工学演習（数学専修）B
- ◆ 電子情報工学演習（工業専修）A
- ◆ 電子情報工学演習（工業専修）B

○:必修科目
◆:必修選択科目

大学院共通（各2単位）
- 全人教育研究
- ELF 500
- 統計
- IB教師教育 各種
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践A
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践B
- 研究者倫理
- Research Presentation

修　士　論　文

システム科学専攻（博士課程後期）

システム科学専攻では、高度に専門化された科学技術をシステムとして体系化し融合することにより、科学技術を社会にいかすことのできる国際的な視野に立った新たな価値を創造できる研究者・技術者を育成することを目的に教育研究活動を行っています。具体的には、大学院修士課程修了者に対して、高度な専門的知識と、関連する分野の基礎的素養の涵養を図り、学際的分野への対応能力を含めた専門的知識を活用・応用する能力を培う教育を展開し、次世代情報技術開発者、情報セキュリティ技術者、ヒューマンインタフェース開発者、画像応用技術者、ロボット応用技術者、経営コンサルタント、電子デバイス技術者、大学教員など高度情報技術社会の幅広い分野で活躍する人材の育成をめざします。

特別研究（必修、各２単位）

研究サーベイ
↓
研究企画・方法論
↓
分析・モデリング
↓
論文構成・表現法
↓
研究セミナー

システム科学 専門科目（選択）

分野A
- 量子情報処理特論②
- 量子情報理論②
- 量子通信理論②
- 光通信工学②

分野B
- 応用解析学特論②
- 幾何学特論②
- 画像符号化特論②
- 情報セキュリティ特論②
- 知能情報数理特論②

分野C
- 脳情報システム論②
- 認知システム論②
- 認知発達ロボティクス②

分野D
- 新材料創成論②
- マネジメントコントロール理論②
- 超伝導現象論②

特別講義（選択）

- システム科学特別講義A①
- システム科学特別講義B①

研修研究（選択）

- システム科学研修研究②

博　士　論　文

教員紹介

★……修士課程研究指導教員　★★……修士課程・博士課程研究指導教員

▶ 機械工学専攻



川森 重弘 教授

博士（工学）★★

研究テーマ

金属粉末およびセラミックス粒子を用いた新材料の開発に関する研究。主に次の新材料を創製している。(1)セラミックス粒子分散マグネシウム複合材料、(2)鉄高炭素合金。

所属学会

日本機械学会、日本金属学会、日本塑性加工学会、粉体粉末冶金協会



木村 仁 教授

博士（工学）★

生体を優れた機能を有する機械システムと見ることで、これをロボティクス・メカトロニクスの観点から工学的に応用するバイオメカニクスの研究を行っている。柔軟な密閉型袋状構造の内部を加減圧することでこれを構造物とアクチュエータの両方として利用する水力学的骨格で構成された、全体が柔軟に変形する機械システム、具体例としては個々の体格に応じて適切に能動変形する枕やベッド、柔軟パワーアシストスーツなどの開発を行っている。また、機械システムのヒューマンインタラクションの一環として使いやすいユーザインターフェイスの研究も行っている。

所属学会

日本ロボット学会、日本機械学会、日本電気学会、日本フルードパワーシステム学会



日下 芳朗 教授

博士（理学）★

自然現象を微分方程式として定式化し、数学的に解析することで現象の仕組みを明らかにしていくことに関心がある。具体的には、氷が融けたり、水が氷るような相転移現象や、あるいは個体の上を流れる水滴の挙動などを数学の立場から厳密に考察している。これらの現象は、その数学的扱いの難しさに加えて、現象を定式化する際の物理学的な難しさもあり、その解析はいずれも大変難しい。



黒田 潔 教授

博士（工学）★

工学系初年次学生に対する物理学教育の学習改善を目的とした教育システムの構築、大学生・大学院生に対する効果的な財産教育方法の開発等、主に教育を視野に入れた研究を進めている。また、様々な特許権・意匠権・商標権の分析により、工学と社会の関わりについて、工学的および社会学的視点から知識と見識を深める研究にも関わっている。さらに、酸化物高温超伝導材料・固体酸化物燃料電池電解質材料に関し、独自に育成した単結晶を用いて物質固有の特性を明らかにすることを目的としている。

所属学会

日本物理学会、応用物理学会、日本物理教育学会、日本知財学会、日本セラミックス協会、日本金属学会、科学技術社会論学会、文化財保存修復学会



小酒井 正和 教授

博士（経営学）★

経営戦略のマネジメントやマネジメントコントロールの側面から、経営の現場を重視したコストマネジメント技法やIT経営を研究している。具体的には、バランスト・スコアカード（BSC）の理論研究、IT投資マネジメント実務のフィールド研究を行い、理論の体系化を試みている。現在は生産労働人口減少社会における中小企業の人的資本経営のあり方について研究している。

所属学会

日本経営工学会、経営情報学会、日本会計研究学会、日本管理会計学会など

著書

『BSCによる戦略志向のITマネジメント』（白桃書房）など



斉藤 純 教授

修士（工学）★

研究テーマ

再生可能エネルギーと資源循環型エネルギーを組み合わせて電気自動車などの移動手段に利用するハイブリッドシステムの研究を行っている。エネルギー源やエネルギーキャリアの多様化や循環利用が検討される中、太陽電池とマグネシウム空気電池を組み合わせたハイブリッド・ソーラーカーや、マグネシウムを燃料としたオフグリッド型充電ステーションなどのインフラモデルの開発に取り組んでいる。また、エネルギーの有効活用をテーマにしたプロジェクト型教育にも取り組んでいる。

所属学会

応用物理学会、日本工学教育協会、日本技術史教育学会



佐藤 健治 教授

博士（理学）★

数学、その中でも幾何学を専門として研究を行なっている。現在は、平面内の三角形で成立する命題が次元を上げた三次元ユークリッド空間（平坦な空間）内の四面体あるいはそれ以上の次元のユークリッド空間内においても成立するか、または球面内の三角形でも、さらに次元を上げた球面内や双曲空間（球面と逆に曲がった空間）内でも成立するか、などを考察している。また、これらの命題が一般に成立しない場合には成立するための条件は何かを考察し、次元や平坦性がどのようにこういった性質と関わってくるかを解明したいと考えている。

所属学会

日本数学会



三林 洋介 教授

博士（工学）★

システムにおける人間と多要素の交互作用を科学的に理解すること、そして人間の福利と人間を含むシステム全体の遂行能力を最適化するために、人間の種々の特性、理論、原理、データおよび方法を設計に活かして実践人間工学研究に取り組んでいる。すなわちヒューマンインターフェイスの最適化、適正化の探求が研究テーマである。対象は、医療現場から交通安全、製品デザインの開発研究まで広範囲にわたる。

所属学会

日本人間工学会、日本臨床生理学会、日本交通科学学会、日本経営工学会、産業保健人間工学会



引地 力男 教授

博士（工学）★

研究テーマ

ターボチャージャなど自動車部品の超精密加工、省力化を目指した農業機械の開発、廃棄物を利用した健康器具の開発、生徒の積極的な探究学習を目指した教材開発、現場に適合した能動的安全衛生マネジメントの構築など、民間企業、社会福祉団体、学校現場などの課題解決に直結した研究テーマに携わっている。その他、技術士として民間企業の技術相談にも適宜対応している。

所属学会

精密工学会、日本機械学会、日本工学教育協会、砥粒加工学会、日本産業技術教育学会



髙橋 宗良 准教授

博士（工学）★

人間のコミュニケーションや選好判断・意思決定のメカニズム、そしてその背後にある潜在的な情報処理プロセスを理解することを研究テーマとしている。そのために、視線計測やモーションキャプチャ、脳活動計測などを用いた心理実験と数理モデルの計算機シミュレーションを組み合わせた認知科学的研究を行っている。また取得した多種多様なデータを包括的に解析するためのAI技術によるデータ分析手法の開発にも取り組んでいる。

所属学会

日本神経科学学会、北米神経科学学会

▶ 電子情報工学専攻



大竹 敢 教授

博士（工学）★★

画像・映像の高能率符号化、超解像、画像解析、非線形最適化などの研究を行っている。特に、網膜系情報処理を行うユニバーサルなニューロマシンとして提案されているセルラーニューラルネットワークによる非線形ダイナミクスを最適化問題に帰着させることにより、高速で最適な予測処理を実現し、画像処理に限らず様々な分野への応用について研究を進めている。

所属学会

IEEE、電子情報通信学会、信号処理学会



加藤 研太郎 教授

博士（工学）★★

高速・大容量の通信環境を提供してくれる光通信網は、現代社会を支える重要なインフラのひとつとなっており、そこを通じて伝送される情報の安全性にも関心が高まっている。このような背景の中、光通信のための暗号化法について、理論の立場から研究を行っている。光は本質的にゆらぎの性質を持っている。このゆらぎを情報の秘匿に効果的に利用するためには、現代の情報通信理論の中から生まれたアイデアや技術と、量子情報科学の研究の中から得られる新しい知見を、それぞれ駆使しなければならない。高度な機能を持つ情報通信システムに向けての、設計論としての量子情報理論の構築をめざしている。



坂﨑 尚生 教授

博士（情報科学）★

暗号理論、暗号プロトコル、セキュリティ技術応用、社会問題解決などの研究を行っている。情報セキュリティは、情報社会の基盤の一つとして欠かせないものとなっており、技術的な知識に加えて、法律、社会制度、心理学などを包括的に研究することが重要である。社会構造の変化や世の中のニーズを見極め、安全性と利便性の両立をめざした新しいセキュリティ技術とそのセキュリティ技術を応用したサービスの構築に取り組んでいる。

所属学会

情報処理学会、電子情報通信学会



佐々木 寛 教授

博士（工学）★

ヒトを対象とした非侵襲的脳活動計測技術に関する基礎研究、その技術による神経メカニズムの解明に向けた応用研究を行っている。神経細胞の電気的活動を直接反映していると考えられ、頭皮上で計測される脳波のデータから、脳内過程を推定する解析手法の研究と、それを応用した記憶の脳内神経メカニズムの研究を主たる研究テーマとしている。人間にとって使いやすいシステムの開発と評価（工学への応用）、効果的な指導法、学習法の開発と評価（教育への応用）などをめざしている。

所属学会

米国神経科学学会、日本神経科学学会、計測自動制御学会、日本睡眠学会



佐藤 雅俊 教授

博士（工学）★★

画像処理とInternet of Things（IoT）をテーマとした研究を行っている。画像処理では、セグメンテーション・ステレオマッチング・フォトモンタージュなど活用の幅が広く、高性能であるGraph Cutsについて、より効果的なアルゴリズムを生み出すための基礎理論の研究から応用研究まで幅広くテーマを扱っている。IoTでは、環境情報を取得するためのセンサがついたバッテリ駆動無線端末を空間に複数散在させ、それらが自律的にネットワークを構築して目的に応じた情報を収集することができる技術である無線センサネットワークについて研究を行っている。

所属学会

電子情報通信学会、IEEE、信号処理学会



塩澤 秀和 教授

博士（工学）★

コンピュータグラフィックスを用いてデータ空間を可視化し、ユーザの理解や検索を支援する情報可視化、コンピュータおよびネットワークを利用した協同作業の支援技術（CSCW）、その他VR／AR技術を利用した教育学習支援システムなどを研究テーマとしている。

所属学会

情報処理学会、日本バーチャルリアリティ学会、教育システム情報学会、可視化情報学会、ヒューマンインタフェース学会、ACM、IEEE-CS他

著書

『ヒューマンコンピュータインタラクション』、『Linux演習』（共に情報処理学会・オーム社）など



相馬 正宜 教授

博士（数理科学）★★

量子情報理論の研究。量子通信路に対する符号理論を完成させることにより、動画伝送も可能な高速宇宙通信の実現をめざす。またそのための基礎として、量子ガウス状態の性質の解明、様々なbosonic通信路に対する通信容量と信頼性関数の解析を行っている。

所属学会

IEEE、American Physical Society、電子情報通信学会



谷澤 健 教授

博士（工学）★★

安全で大容量な通信ネットワークの実現を目標に、光通信システムおよび光デバイスの研究を行っています。光がもつ量子性と波動性を活用することで、従来にはない機能を備えたシステムやデバイスの創出が可能です。その代表例の一つが Y-00 光通信量子暗号です。さらなる高速化・大容量化と高い安全性の両立を目指した研究に取り組んでいます。電磁気学、通信工学、量子光学の基礎から、電子回路やプログラミングなどの実装技術までを駆使し、次世代光通信技術の開拓に挑戦しています。

所属学会

電子情報通信学会、IEEE



中平 健治 教授

博士（工学）★★

ミクロの物質が持つ不思議な性質を扱う物理理論（量子論）を積極的に活用して高度な情報処理・情報通信を実現することをめざし、量子情報に関する基礎理論の研究を進めている。特に、量子レーダや量子センシングへの応用を図り、量子現象を利用して従来よりも高感度な受信機を設計する方法を開発し、その理論限界の解析を行っている。

所属学会

IEEE、American Physical Society、電子情報通信学会



成川 康男 教授

博士（理学）★

数学・応用数学・数学教育が研究テーマとなる。非加法的集合関数の数学的な性質を調べることが第一の研究のテーマである。また、非加法的な現象は、人間の感覚のあいまいさと密接な関係があり、人間の感覚・判断を、非加法的集合関数を用いて表現することも研究している。また、数学教育については、様々な教育方法の効果、特にICT活用の効果についても研究している。

所属学会

日本数学会、日本数学教育学会、日本知能情報ファジィ学会、日本LD学会、日本教育工学会など

著書

Modeling Decisions: Information Fusion and Aggregation Operators （Springer）など



濵田 充 教授

博士（工学）★★

通信中に情報が劣化することを防ぐという技術課題を考えてみよう。通信路が古典力学的なモデルで記述される場合には確立した理論と技術、すなわち情報理論・誤り訂正符号がある。通信路が量子力学的な振る舞いをする場合にもこれらの理論・技術は役立つだろうか？答えは「Yes and No」である。すなわち、これらの理論・技術の拡張として量子情報理論・量子誤り訂正符号があるが、これらはまだ若く完成からは程遠い分野である。また、量子誤り訂正符号は量子コンピュータの実現に必要な技術として考案されたもので量子暗号への応用も知られているが、量子コンピュータや量子暗号についてはその原理についても研究の余地がある。当教員もこれらの萌芽的分野の発展の一翼を担っている。



二見 史生 教授

博士（工学）★★

ネットの安全性向上を目的に物理効果を利用した暗号通信技術を開発し、従来の暗号との併用により、更に安全なネットの実現を目指している。量子雑音を利用して安全にデータを通信するY-00光通信量子暗号は、安全性や通信性能に優れており、その要素技術および光ファイバ・光無線通信システム応用技術の研究に注力している。また、新たな暗号技術の基礎研究も実施している。

所属学会

電子情報通信学会、IEEE、OPTICA



政田 元太 教授

理学博士★

自動運転化技術への関心が集まるなか、雨天や霧中でも使用可能なレーダー技術への期待が高まっている。このような背景のもと、全天候型の量子レーダーカメラの実現を目指して、高出力な量子エンタングルメント光源およびその周辺技術の実験研究に従事している。

所属学会

日本物理学会、応用物理学会



宮田 成紀 教授

博士（工学）★

薄膜プロセスによる超伝導体の線材技術の開発とその電流特性の向上に関する研究を行っている。イオンビームスパッタ法、パルスレーザー法、化学蒸着法など各種方法を用いた酸化物系高温超伝導体の薄膜プロセスにおける高速化・高収率化・低コスト化などのプロセス開発を行うとともに、超伝導体に侵入した量子化磁束線のピン留め特性の改善による臨界電流密度値の向上などをめざした研究を行っている。また線材レベルの研究だけでなくアウトプットとしての超伝導送電システムの開発プロジェクトなどにも参画している。

所属学会

応用物理学会、低温工学・超電導学会



森 文彦 教授

博士（工学）★

画像処理の研究として、自動運転に必須の要素技術である「白線と自動車（自己）」の相対位置の正確な抽出の研究を行うとともに「衝突予測法の開発と衝突回避ロボットの発明・領域分割法・境界線抽出法」などを行っている。また、科学的研究として、頭脳の基本的機能の1つである「頭の中の地図（自己の生存する世界の時空間的構造）」の特性を心理実験を通して明らかにする研究も行っている。（目標：人工頭脳HAL9000）

所属学会

電子情報通信学会、電気学会（他）



山﨑 浩一 教授

工学博士★

量子暗号鍵配送に関する研究に従事。特に、既存の光通信技術を用いたYuen-Kim方式の実現に向けて、鍵生成速度の改善、光増幅器の利用可能性などについて研究を進めている。また、量子暗号鍵配送で用いる誤り訂正技術の開発に取り組んでいる。担当科目は“情報セキュリティ概論”、“暗号と符号理論”。

所属学会

電子情報通信学会、IEEE、信号処理学会



青野 修一 准教授

博士（工学）★

人工知能エンジン、機械学習アルゴリズム、非線形解析などの研究を行っている。特に、医工連携をテーマに、AI技術を活用した未来の医療支援システムを開発することに注力しており、慢性疼痛患者の医療データベースを構築し、医療従事者の主観的な情報や経験に基づく暗黙知とAI技術を融合させた診断支援AIシステムの社会実装を進めている。

所属学会

IEEE、IASP、電子情報通信学会、信号処理学会、情報処理学会、人工知能学会、日本疼痛学会、日本運動器疼痛学会



折登 由希子 准教授

博士（工学）★

身近な最適化問題に対する最適化モデルの構築と最適化手法の改良・開発を研究テーマとしている。特に、計算知能における最適解の探索技術である進化計算アルゴリズムを研究対象とし、資産配分問題のポートフォリオ複製問題や反復順列問題の時系列献立計画問題などに実装している。

所属学会

電気学会、進化計算学会、情報処理学会



水地 良明 准教授

博士（工学）★

生活支援を行う自律型ロボットの知能構築、特に人間とロボットのインタラクションに関する研究を行っている。クラウド型VRプラットフォームやデジタルツイン技術を活用した効率的な対話行動データの収集、協調行動の主観的な品質の評価基準設計やモデル化、フィジカルAIとの統合を通して、ユーザの好みや期待に合わせた適応型インタラクションの実現を目指している。また、実証実験の場として、国内外のロボット競技会にも参加している。

所属学会

日本ロボット学会、人工知能学会、ロボカップ日本委員会、IEEE

Graduate School of Management

マネジメント研究科

マネジメント専攻（修士課程）

グローバル時代のマネジメントを学び、高度な実践力を備えた人材を育成

「グローバル・マーケティング」「会計学」「グローバル・ツーリズム」の3つの研究コースにリニューアルし、グローバル時代のマネジメントを理論研究とケーススタディから学び、高度な実践力を備えた人材を育成します。



グローバル・マーケティング
研究コース



会計学
研究コース



グローバル・ツーリズム
研究コース

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

マネジメント研究科修士課程は、学士課程で学んだ経営学・会計学等の専門領域を深めさらに高い能力を備えた次世代ビジネスリーダー、経営後継者、会計専門職等を育成しています。このため以下の能力や意欲を備えた人の入学を望みます。

学士課程で培った経営学・会計学等の基礎能力をもとに、各研究コースにおいて、グローバル・マーケティング、会計学、もしくはグローバル・ツーリズムの分野を自ら探究する研究意欲のある人、および高度専門職に必要な知識・能力の修得をめざす人。

なお、こうした能力や意欲があるかどうかの評価は、学士課程で通常修得すべき経営学・会計学等の平均的能力に加えて、主体的に議論が展開できる応用的能力が修得されているかどうかで行います。

修了生Interview　玉川大学 学修サポート・デスク 指導員、専門学校・職業訓練校 会計学関連科目 講師

問題意識・目的意識を持ち、自身の考えや答えに根拠を持つことを学びました。



マネジメント研究科
マネジメント専攻（修士課程）
2011年3月修了
谷津 愛美 さん

大学院では、自身の専門分野だけに限らず、社会や企業を取り巻くさまざまな知識を肌で感じて修得することができます。私は、会計に関しての知識が深まったことはもちろん、問題意識・目的意識を持つこと、そして何より自身の考えや答えに根拠を持つことを学びました。外部の実務家の方による授業やディスカッションの場が多くあり、企業経営やマーケティングに携わる上で必要となる「多角的な視野」を手に入れることができ、とても有意義でした。

大学で学んだ「会計学」の授業内容がとても新鮮で、3年次にはその先生のゼミを選択。大学時代は、受動的に知識のインプットばかりしていましたが、大学院では能動的に学ぶ必要があり、先生と議論する機会も多くありました。時には厳しいお言葉もいただいたおかげで理解を深めることができ、今も当時と変わらず、心から信頼・尊敬できる先生との出会いになりました。

修了後は、大学の学修指導員や専門学校などの会計学関連科目の講師として、一般企業の経理業務での経験もいかしつつ、学生たちと向き合う日々を送っています。ただ「優しい」だけでなく、学生のためになる勉強方法や考え方・解き方を模索し、時には厳しく、しかし愛情を持って「的確な言葉」で伝えることを常に大事にしています。

日本にも国際会計基準が導入されるなど、日々、会計の基準は変化しています。玉川大学大学院には、公認会計士や税理士などをめざすカリキュラムが置かれているので、USCPAを取得し、将来的には国際的な会計人として活躍することを夢見る方にとって、とても魅力的だと思います。私も、知識が古くならないよう情報収集を怠らず、常に新しい情報を発信できる先生をめざします。

詳細はホームページをご覧ください。https://www.tamagawa.jp/graduate/manage/

グローバル・マーケティング研究コース（修士課程）



グローバル・マーケティング研究コースは経営戦略論をはじめとし、中小企業経営ならびにマーケティング研究にわたる幅広い分野の高度なマネジメント理論とケーススタディを通じた実践論の知識修得を目的としています。現在はグローバル社会といわれるように、世界全体をひとつのシステムとしてとらえ、その状況下で最適なマネジメントを進めることが不可欠です。また、近年の経営を考えるにあたり、地域間協定や国際標準化、サステナビリティといった経営を取り巻く環境変化のキーワードを無視することはできません。マネジメントに関する専門科目に加え、現在注目されている研究テーマを意識した科目が設置されているのも特長の一つです。高度な専門知識を有する次世代のビジネスリーダー、経営後継者の育成に貢献します。

各2単位、※は1単位

経営科目群

必修

- グローバル経営戦略研究
- 国際標準化戦略 製品開発研究
- グローバル中小企業経営研究
- グローバル・マーケティング研究
- グローバル流通研究

選択

- グローバル・マーケティング ケーススタディ
- 国際標準化戦略 ケーススタディ（CSR）
- グローバル中小企業経営 ケーススタディ
- 国際ビジネス ケーススタディ
- グローバル人材マネジメント ケーススタディ

共通科目群

必修選択

- 文献研究セミナーⅠ※
- 文献研究セミナーⅡ※
- 論文作成セミナーⅠ
- 論文作成セミナーⅡ
- 課題調査セミナーⅠ※
- 課題調査セミナーⅡ※
- 課題研究セミナーⅠ
- 課題研究セミナーⅡ

選択

- 統計
- English for Academic Administration
- Quality Control
- インターンシップ

会計学研究コース（修士課程）



会計、法律、金融・経済科目の理論的・実践的研究によって、公認会計士として活躍できる人材を養成します。国際会計基準（IFRS）を基礎に会計学研究を進めるとともに、米国公認会計士（U.S. CPA）を取得し、英語を強みとした会計プロフェッショナルとしてグローバルな活躍を視野に入れることができます。

会計科目群

必修

- Accounting for Managers and Controllers 理論研究
- Accounting for Managers and Controllers 問題演習
- 財務会計 理論研究
- 財務会計 問題演習
- 管理会計 理論研究
- 管理会計 問題演習
- 監査 理論研究
- 監査 問題演習

法律科目群

必修

- 企業法 理論研究
- 企業法 問題演習
- 租税法 理論研究
- 租税法 問題演習

金融・経済科目群

必修選択

- ファイナンス 理論研究
- ファイナンス 問題演習
- 経済学 理論研究
- 経済学 問題演習

共通科目群

必修選択

- 論文作成セミナーⅠ
- 論文作成セミナーⅡ
- 課題研究セミナーⅠ
- 課題研究セミナーⅡ

選択

- 統計
- English for Academic Administration
- Quality Control
- インターンシップ

グローバル・ツーリズム研究コース（修士課程）



グローバルに展開するツーリズム産業は、国際的な人の移動の拡大、デジタル化、持続可能な観光への関心の高まりを背景に、大きく変化しています。観光・ホスピタリティの現場では、市場の変化を読み解き、多様な文化や価値観を理解しながら、課題解決に取り組む人材が求められています。本コースでは、マネジメント、マーケティング、地域・文化、サステナビリティなどの視点から、理論と実践をつなぐ研究を進めます。修了者は、観光関連企業、ホテル、旅行、航空、地域観光、行政等幅広い分野での活躍が期待されます。

各2単位、※は1単位

観光科目群

必修

- グローバル・ツーリズム研究
- ホスピタリティ・ビジネス研究
- 観光政策研究
- 観光消費者行動研究

選択

- ユニフォーム会計 ケーススタディ
- エコツーリズム ケーススタディ
- インバウンド観光 ケーススタディ
- アジア観光文化 ケーススタディ
- ツーリズムリサーチ・メソッド

経営科目群

必修

- グローバル・マーケティング研究

共通科目群

必修選択

- 文献研究セミナーⅠ※
- 文献研究セミナーⅡ※
- 論文作成セミナーⅠ
- 論文作成セミナーⅡ
- 課題調査セミナーⅠ※
- 課題調査セミナーⅡ※
- 課題研究セミナーⅠ
- 課題研究セミナーⅡ

選択

- 統計
- English for Academic Administration
- Quality Control
- インターンシップ

教員紹介　研究指導教員

▶ グローバル・マーケティング研究コース



大木 栄一 教授
経営学修士

担当
経営科目群、研究指導

専攻分野
人的資源管理

研究テーマ
企業内教育訓練、人材ビジネスの社会的機能

主要研究業績
著者『働く人の「学習」論』(編著／学文社)、『人材サービス産業の新しい役割』(編著／有斐閣)など。



神谷 渉 教授
博士(商学)

担当
経営科目群、研究指導

専攻分野
グローバルマーケティング、消費者行動

研究テーマ
グローバル企業の流通チャネル戦略

主要研究業績
著書『中国・東南アジアにおける流通・マーケティング革新:内なるグローバリゼーションのもとでの市場と競争(専修大学商学研究所叢書)』(白桃書房)、『ショッパー・マーケティング』(日本経済新聞出版社)(いずれも共著)



木内 正光 教授
博士(工学)

担当
経営科目群、研究指導

専攻分野
管理技術、生産マネジメント

研究テーマ
生産管理と品質管理

主要研究業績
著書『現場から経営を考える』(日本規格協会)、論文「A Study on Quality Function Deployment and Industrial Information: Towards Digital Transformation」『Journal of Japan Industrial Management Association』など。

▶ 会計学研究コース



石田 万由里 教授
博士(経営学)

担当
会計科目群、研究指導

専攻分野
国際会計、財務会計、制度会計

研究テーマ
会計基準のコンバージェンス／非営利組織(社会福祉法人)の会計制度／負債と資本の区分にかかる理論研究

主要研究業績
著書『非営利組織体の簿記研究』(中央経済社)、『27業種別 簿記・会計の処理と表示』(中央経済社)、『日本簿記学説の歴史探訪』(創成社)(いずれも分筆担当)、論文「『負債と持分の区分』問題の評価基準ー財務諸表の表示と新たなアプローチー」など。



伊藤 良二 教授
修士(経済学)
博士課程後期課程満期退学

担当
会計科目群、研究指導

専攻分野
財務会計、国際会計

研究テーマ
コーポレート・ガバナンスと財務報告、会計基準の国際的統合

主要研究業績
論文「ストック・オプションによる報酬費用と利益概念」『會計』、「グローバルな会計規制を巡るガバナンス体制の構築」『経理研究(中央大学)』など。

▶ グローバル・ツーリズム研究コース



小林 直樹 教授
博士(経営学)

担当
統計、研究指導

専攻分野
財務会計

研究テーマ
実証的会計研究におけるMCMCの応用

主要研究業績
論文「AN EMPIRICAL ANALYSIS OF THE ASSOCIATION BETWEEN STOCK RETURN AFTER THE ANNOUNCEMENTS OF IMPAIRED ASSETS AND ACT CONCERNING REVALUATION OF LAND IN JAPAN」、著書『財務諸表外情報の開示と保証』(共著／同文舘)



中村 哲 教授
修士(観光学)
博士課程単位取得

担当
観光科目群、研究指導

専攻分野
観光行動論、観光マーケティング

研究テーマ
日本人の海外旅行の意思決定と阻害要因、若者の海外旅行行動、旅行者のリスク知覚、旅行の教育効果

主要研究業績
著書『若者の海外旅行離れを読み解く』(共著筆頭／法律文化社)、『観光学全集第4巻 観光行動論』(分担執筆／原書房)、『観光の事典』(分担執筆／朝倉書店)など。



根木 良友 教授
Master of Management in Hospitality

担当
観光科目群、研究指導

専攻分野
ホテルマネジメント

研究テーマ
観光人材育成、ホテルマネジメント

主要研究業績
著書『ホテルビジネス基礎編／管理編』(財団法人日本ホテル教育センター)、『インターンシップ入門』、『インターンシップ実践ガイド』(玉川大学出版部)





菊池 史光 教授

博士（商学）

担当
経営科目群、研究指導

専攻分野
消費者行動、マーケティング

研究テーマ
消費者の選択肢評価

主要研究業績
論文「Unveiling Brand Convergence in Consideration Sets: The Effects of Purchase for Self or Others and Product Nature」『Review of Marketing Science』など。



永井 一志 教授

修士（工学）

担当
経営科目群、研究指導

専攻分野
品質管理、新製品開発、マネジメント

研究テーマ
新製品開発と品質機能展開

主要研究業績
著書『第3世代のQFD』（日科技連）、論文「A study on the effects of Client Company Information on the On-Site Logistics and Process in a Supply Chain」『Expert Journal of Business and Management』など。



田中 美和 准教授

博士（経営学）

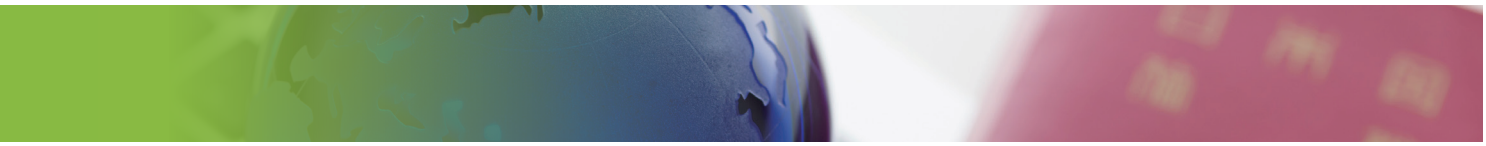
担当
経営科目群、研究指導

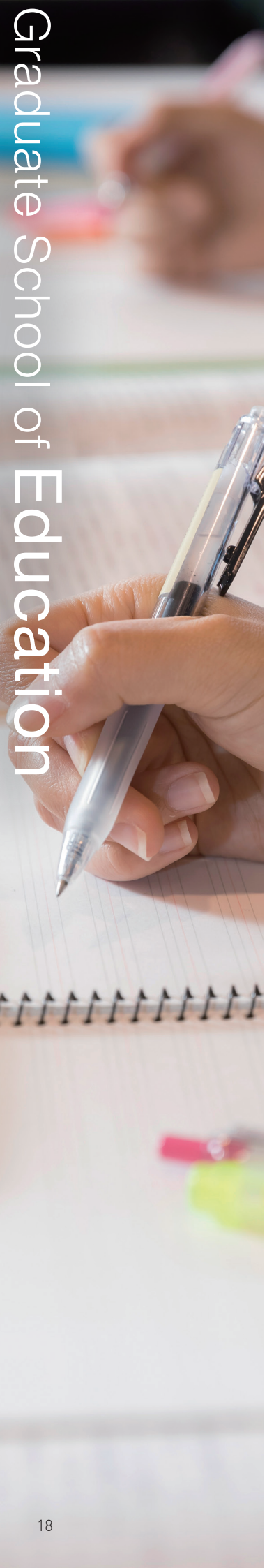
専攻分野
経営学

研究テーマ
ものづくり経営学、技術経営

主要研究業績
論文「日本自動車産業における次世代車開発時に中核的サプライヤーが果たす役割」『イノベーションマネジメント』（法政大学イノベーション・マネジメント研究センター）など。







Graduate School of Education

教育学研究科

教育学専攻（修士課程）

柔軟な思考力と洞察力で、教育現場の激しい変化や諸問題に対応できる教育者・研究者を育成

「教員養成の玉川」としての伝統と実績を踏まえた教育学研究を基盤に、初等教育・乳幼児教育・教師教育学を中心に高度な研究を行うことを目的としています。本学創立の理念である全人教育の精神に基づき、教育研究を通して培う柔軟な思考力と洞察力で、教育現場の激しい変化や諸問題に対応できる高度な教育実践者・研究者を育成します。

教育学研究科 教育学専攻の特色

取得可能な教育職員免許状
小学校教諭専修免許状
幼稚園教諭専修免許状
全コース
※所有している免許状や履修科目の選択に条件があります。

IB教員認定証（IBEC・CTL）
全てのコースで取得可能（2030年度入学生まで）
※CTLに関する科目は昼間のみ開講
※ただし別途費用がかかります。

夜間開講授業
原則遠隔（オンライン）方式です。
全コースで夜間履修が可能

丁寧な研究指導
マンツーマンに近い指導体制を整え
個のニーズに対応した教育

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

教育学研究科教育学専攻は、修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）および教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、入学者受け入れ方針を以下に明示します。

1. 本学創立の理念である全人教育の精神に関して基本的に理解している人
2. 教育学研究の基盤となる、次の基礎的知識を2つ以上の領域で持っている人
   - (1)教育の理念並びに教育に関する歴史および思想に関する内容
   - (2)子どもの発達および学習の過程に関する内容
   - (3)教育の社会的、制度的または経営的事項に関する内容
   - (4)教育課程の意義および編成に関する内容
   - (5)教育の方法および技術に関する内容
   - (6)教職の意義に関する内容
3. 教育学研究を進める上で必要とされる外国語に関する能力を持っている人
4. 研究者、社会人として求められる研究への意欲およびコミュニケーション能力を持っている人

これらの知識・能力は、申請書類、筆答・論述試験および面接・口述試験で総合的に評価します。

修了生Interview　社会福祉法人 仁慈保幼園 世田谷代田仁慈保幼園 勤務

働きながら学び、保育のあり方を俯瞰できるように。



教育学研究科
教育学専攻
2026年3月修了
小谷 悠 さん

大学卒業後、7年を経て大学院に進学。保育園の常勤職員として働きながら学んでいたため、授業で得た学びが翌日の保育現場で腑に落ちたり、日々悩んでいたことへのヒントにつながったりすることも多くありました。知識と実践を往還する中で、学びがより深まっていったと感じています。また、子どもや保護者への関わり方について、現場の保育者としての視点だけでなく、研究者としての視点からも考えられるようになり、より多面的に向き合えるようになりました。保育をさまざまな専門分野から学んだことで、自分のクラスだけでなく、園全体を俯瞰して捉える視点も身につきました。

修士論文の執筆では、最後までていねいに指導していただきました。論文提出後、先生と一緒にお弁当を食べたときの、ほっとした気持ちは忘れられません。論文と向き合う中で、データから見えてくる子どもの姿の面白さに気づかされ、研究の楽しさも実感。先生方が親身に、時にはユーモアを交えながら研究を支えてくださる環境は、玉川大学大学院の大きな魅力です。

現在は、3・4・5歳児クラスの担任と幼児クラスリーダーを務めています。研究という側面から保育に触れたことで、その奥深さを改めて実感するとともに、今後のキャリアにつながる多くの出会いにも恵まれました。何より、子どものそばにいること、保育に携わることが本当に好きなのだと再確認できた2年間でした。

詳細はホームページをご覧ください。
https://www.tamagawa.jp/graduate/educate/



研究コース　※全てのコースが夜間で履修可能です。

は夜間開講授業あり

教育学研究コース

教育諸科学における理論的研究を深め、教育学研究に貢献する研究者の養成をめざします。また、専門性の高い小学校現場の中核になる教員を養成します。

乳幼児教育研究コース

大きく変わりつつある幼児教育・保育分野で求められる、専門性の高い保育現場の中核になる保育者やリーダーを養成します。

教師教育学研究コース

学校教員経験者を主な対象として、それまでの実践経験を理論と融合させ、教員養成を行う課程を担当できる大学教員養成をめざします。

コースごとの詳細はコチラ
https://www.tamagawa.jp/graduate/educate/course/

夜間開講授業 ※原則遠隔（オンライン）方式です。

- 昼夜開講科目を自分の都合で選択
- 夜間開講は月・金曜日（週2回）18:20~20:50
- 夏期・冬期等に集中講義を開講
- 2年間で修了が可能 ※条件により専修免許状取得が可能

※夜間授業では開講科目が限られています。修了に必要な単位は原則夜間のみで履修可能ですが、希望する科目が開講されない場合があります。

教育学研究科 教育学専攻（修士課程）の概要イメージ図

教育学基礎科目群　教育学研究　では、この科目群を中心に履修

教育哲学研究	教育思想史研究	比較教育学研究	教育史研究	教育心理学研究
臨床心理学研究	教育課程研究	教育方法学研究	教育技術研究	教育社会学研究
教育行政学研究	教育経営学研究	教師教育学研究	教育学質的研究方法	教育学量的研究方法

関連科目群

- 全人教育研究
- 脳科学と教育
- 特別支援教育実践研究
- 教員養成海外制度研究
- 大学教員資格研究
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践A
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践B
- コンピュータと教育
- 特別支援教育研究
- 教職特別実習（幼・小）
- 教育学実践演習Ⅰ
- 教育学実践演習Ⅱ
- IB教師教育IA
- IB教師教育IB
- IB教師教育IC
- IB教師教育（PYP）ⅡA*
- IB教師教育（PYP）ⅡB*
- IB教師教育（MYP）ⅡA
- IB教師教育（MYP）ⅡB
- IB教師教育（DP）ⅡA
- IB教師教育（DP）ⅡB

＊オンラインのみ開講（英語）

※IB認定科目の開講は2030年度まで

教育学発展科目群

乳幼児教育研究
- 幼児教育研究
- 幼児表現研究
- 障害児保育研究
- 幼児と人間関係
- 幼児と保健

教師教育学研究
- 教職課程マネジメント研究
- 高等教育研究
- 教員養成・研修制度研究
- 教員養成評価研究
- 教師教育科目指導法研究

特別演習科目群

教育学特別演習Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ

修士論文

教員紹介

研究指導教員資格を有する教員　主に研究指導に関わるコース：教育学研究　乳幼児教育研究　教師教育学研究



教育学　乳幼児教育

岩田 恵子 教授

博士（学術）

専攻分野

発達心理学／保育学

研究テーマ／主要著書・論文

主な研究テーマは、保育の場における子どもたちの学びや育ち、さらにはその子どもたちにかかわる大人の学びや育ちを、社会文化的な視点、二人称的アプローチで捉えること。最近の研究論文としては、「保育の可視化へのプロセス」（共著、玉川大学学術研究所紀要）、「保育実践への『二人称的アプローチ』」（保育学研究）、「幼稚園における仲間づくり：『安心』関係から『信頼』関係を築く道筋の探究」（保育学研究）など。著書は、『子どもの遊びを考える』（共著、北大路書房）、『「子どもがケアする世界」をケアする』（共著、ミネルヴァ書房）、『保育の心理学』（共著、中央法規）、『教えと学びを考える学習・発達論』（編著、玉川大学出版部）『エピソードから楽しく学ぼう 子ども理解と支援』（共著、創成社）、『人間関係の指導法』（共編著、玉川大学出版部）、『絵本ものがたりFIND』（共著、朝倉書店）など。



教育学　乳幼児教育

大豆生田 啓友 教授

文学修士

専攻分野

乳幼児教育学・保育学・子育て支援

研究テーマ／主要著書・論文

専門の研究分野は、保育の実践の質に関する研究、子育て支援に関する研究等。特に近年の研究では、ドキュメンテーションに関する研究、園及び地域における研修の質に関する研究（コーディネーターの研究含む）、「共食」の意義に関する研究、対話場面（サークルタイム）に関する研究、倉橋惣三の保育論に関する研究等がある。
最近の著書には、『大豆生田啓友対談集　保育から世界が変わる』（北大路書房、2025年）、『最新保育小六法・資料集2025』（ミネルヴァ書房、2025年）、『豊かな直接体験をベースに　ICTで広がる保育』（チャイルド本社、2025年）、『園のリーダーのためのリスペクト型マネジメント③　多機能化と地域共生の園づくり』（フレーベル館、2024）、『保育の「ヘンな文化」そのままでいいんですか!?』（小学館、2024）、『SDGs時代の保育実践アイデア帳』（フレーベル館、2023）、『子どもが中心の「共主体」の保育へ』（小学館、2023）、『あそびが学びとなる子ども主体の保育実践　子どもと社会』（Gakken、2023）、『0〜5歳児　子どもの姿からつくる　これからの指導計画』（チャイルド本社、2023）、『保育ドキュメンテーションの作り方』（西東社、2023）等がある。



教育学

工藤 亘 教授

修士（教育学）

専攻分野

コミュニケーション学／アドベンチャー教育

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は、コミュニケーション学、アドベンチャー教育、学校教育学（生徒・進路指導）、教育方法学（体験学習）、教育実践学、教師教育学。主な研究テーマは、玉川アドベンチャープログラム（TAP）の実践と理論の往還・統合を目指しつつ、教師や子どものファシリテーション能力・リーダーシップ・自己冒険力の開発に取り組んでいる。
著書は、『図解玉川アドベンチャープログラム（TAP）を通したチームづくりの基礎』（編著・玉川大学出版部）、『アドベンチャーと教育-特別活動とアクティブ道徳教育-』（編著・玉川大学出版部）、『生徒・進路指導の理論と方法　第二版』（編著・玉川大学出版部）、『教育実践学-実践を支える理論-』（共著・大学教育出版）他。研究論文に、「令和の日本型学校教育に求められる教師のファシリテーション能力についての一考察 -学校教育でのファシリテーション・サイクルを目指して-」（単著）、「リーダーシップ教育に関する一考察-キャリア教育とTAPを視座に-」（単著）、「目標設定と振り返りへの指導と支導に関する研究-TAPや体験学習での活用を視座に-」（単著）他。



教育学

小島 佐恵子 教授

修士（文学）

専攻分野

高等教育論／教育社会学

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は、高等教育論、教育社会学。
米国の大学職員の専門職性やキャリアパス、大学における新しい専門職に関する調査研究を行っている。初年次教育にかかわるFD研修会・ワークショップ等も行っている。主な論文・著書は「玉川大学における全学的なFDの取組」（大学評価研究）、「大学における新しい専門職のキャリアと働き方ー聞き取り調査の結果からー」（共著　大学評価・学位研究）、「国内事例にみる学生支援の評価：GP事業を例に」（大学教育学会誌）、『大学事典』（分担執筆　平凡社）、『大学のFD Q&A』（共著　玉川大学出版部）、『大学生活ナビ　第2版』（共著　玉川大学出版部）、『現代アメリカ教育ハンドブック』（アメリカ教育学会編　分担執筆　東信堂）、『初年次教育ハンドブック　学生を「成功」に導くために』（共訳　丸善株式会社）他。



教育学

小谷 恵津子 教授

博士（学校教育学）

専攻分野

社会科教育／生活科教育

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は、社会科教育、地理教育、生活科教育。研究テーマは、概念形成を視点とした地図学習の改善と地図活用能力の育成。近年は、小学校社会科授業での検討にとどまらず、生活科から中学校社会科・高等学校地理総合までを視野に入れ、地図活用能力の系統的指導や地図を通した空間認識形成の研究を行っている。また、地図活用と関連して、社会科における防災学習やまちづくり学習にも関心をもっている。
主要論文・著書は、「生活科での地図活用を通した空間認識形成と社会科との接続」（単著・新地理）、「認識および表現の媒体としての機能に着目した地図活用による小学校社会科防災学習における学びの深まり」（単著・社会系教科教育研究）、「スケール認識の形成を視点とした小学校地図学習の改善－縮尺指導の授業構成と学習内容の検討を通して－」（単著・新地理）、「地図を用いた社会科学習で形成する方法概念と内容概念」（単著・新地理）、「概念探究型社会科における納得をともなう概念の獲得と経験－中学校地理的分野『人口から見た日本』の開発を通して－」（単著・社会科研究）、『初等社会科教育の理論と実践－学びのレリバンスを求めて－』（共著・教育情報出版）、『中学校社会　指導スキル大全』（共著・明治図書）、『生活科で子どもは何を学ぶか－キーワードはカリキュラム・マネジメント－』（共著・東洋館出版社）、『教育実践学としての社会科授業研究の探求』（共著・風間書房）、『「習得・活用・探究」の社会科授業&評価問題プラン小学校編』（共著・明治図書）など。



教育学　教師教育学

佐久間 裕之 教授

文学修士

専攻分野

教育哲学／教育史

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は教育哲学、教育史。主にディルタイ学派の教育学と哲学、特にオットー・フリードリヒ・ボルノーのGeborgenheit（被護性：守られているという存在様態としての安心）とSeinsvertrauen（存在信頼）の研究及び新教育の歴史・思想・実践（特に小原國芳の全人教育論、ペーター・ペーターゼンのイエナ・プラン）の研究に取り組んでいる。
主要論文・著書は、"Lost Japan: focusing on the problems of globalism and nationalism in moral education"（Journal of Philosophy of Education, Oxford University Press 2025）、"Tanimoto Tomeri und Wilhelm Reins Ferienkurse in Jena. Ein typischer Fall für die japanische Rezeption der westlichen Pädagogik"（Stuttgart, Steiner Franz Verlag 2025）、"Sumie Kobayashi and Petersen's Jena-Plan: A Typical Case of the Acceptance of Western Pedagogy in Japan"（Cham, Springer 2020）、"Kuniyoshi Obara's Zenjin education at Tamagawa Gakuen"（London & New York, Routledge 2017）、『教職概論　改訂第2版』（編著、玉川大学出版部、2024年）、『教育原理　改訂第2版』（編著、玉川大学出版部、2022年）、『全人教育の歴史と展望』（共著、玉川大学出版部、2021年）、『教職論』（共著、ミネルヴァ書房、2021年）、『教育のイデア　改訂版』（共著、昭和堂、2020年）、『西洋教育史　新訂版』（編著、玉川大学出版部、2019年）、『教育学の歴史』（共訳、青土社、2015年）など。



教育学

杉山 倫也 教授

修士（文学）

専攻分野

教育哲学／教育史／教育思想

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は教育史・教育哲学・教育思想。
主な研究テーマは次の通り。
①西洋教育史における宗教と教育の関係
主として19世紀のアメリカにおける自由主義キリスト教と教育の関係に焦点をあてて研究している。特に、そこに関わる代表的人物の思想分析をおこなっている。
②小原國芳と全人教育思想
全人教育思想については、特に宗教の問題に着目して研究している。
③①②に基づいて、教職科目については、教育原理・教職概論といった基礎科目および道徳教育の研究をしている。

『教職のための道徳教育』（共著、八千代出版）
『教育原理』（共著、玉川大学出版部）
『西洋教育史』（共著、玉川大学出版部）
『教育原理』（共著、一藝社）
『幼児理解』（共著、一藝社）
『子どもと教育』（共著、一藝社）
『学習経験をつくる大学授業法』（共訳、玉川大学出版部）
「W.Eチャニングにおける能力観ー初期著作における「理性的諸能力」・「道徳的諸能力」ー」（単著、『論叢』）
「帝国大学と國芳ー京都帝国大学入学の特異性と必然性」（単著・全人教育研究センター年報）
「小原國芳の全人教育思想におけるティーレ「宗教学」の受容ー『教育の根本問題としての宗教』における引用文の分析を通して」（単著・全人教育研究センター年報）
「小原國芳の全人教育思想における「宗教論」の形成過程ー『教育の根本問題としての宗教』とティーレ『宗教学原論』」（単著・全人教育研究センター年報）



乳幼児教育

鈴木 美枝子 教授

博士（保健学）

専攻分野

子どもの保健／保育と保健／食生活支援

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は小児保健学、身体発育学、健康教育学。中でも、保育・幼児教育現場における保育と保健の融合や、身体発育曲線を活用した子どもや保護者への支援に関する研究等に取り組んでいる。また厚生労働科学研究補助金「幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド（以下、支援ガイド）の開発に関する研究」にて、主に子どもの偏食等への保育学的な対応について研究してきた。その後、同支援ガイドの有効な活用について検証し、幼児期の肥満への支援についてのコラム、子どもの食に関する困りごとに対するQ&A等も担当している。主な論文・著書は、「高校3年時の不定愁訴と身体発育との関連について―小学生から高校生まで12年間の発育グラフを用いた検討―」（共著、日本成長学会雑誌）、『子どもの生活習慣について―不定愁訴の有訴率と食事のとり方の関連に着目して―』（単著、児童研究）、『これだけはおさえたい！保育者のための子どもの保健［改訂版］』（編著、創成社）、『これだけはおさえたい！保育者のための子どもの健康と安全［改訂2版］』（編著、創成社）、『保育原理』（共著、ミネルヴァ書房）、『保育内容総論』（共著、玉川大学出版部）、『保育内容「健康」』（共著、北大路書房）、『保育・幼児教育シリーズ 健康の指導法』（共著、玉川大学出版部）他。



乳幼児教育

田甫 綾野 教授

博士（学術）

専攻分野

幼児教育学／保育学／児童文化

研究テーマ／主要著書・論文

研究分野は、幼児教育学・保育学・児童文化。主たる研究テーマは保育者のライフストーリーからみる保育実践の歴史や保育者のキャリア形成。また、子どもの遊びや幼児と異世代との交流についての研究も行っている。著書に『保育原理』（共著・ミネルヴァ書房）、『保育学講座4保育者を生きる―専門性と養成』（共著・東京大学出版会）、『笑って子育て―物語でみる発達心理学』（共著・北樹出版）他。研究論文に「小学生のごっこ遊び・劇遊びの分析―「演劇的知」を手がかりに―」（共著・『論叢』玉川大学教育学部紀要）、「集団保育における課題活動への主体的参加の可能性　―保育者のかかわり方を視点として―」（単著・『論叢』玉川大学教育学部紀要）、「昭和31年版幼稚園教育要領に対する保育者の受けとめ方―ライフストーリーにみられる保育者の日常的『構え』を通して」（単著・『保育学研究』）等がある。



教育学

原田 眞理 教授

博士（保健学）

専攻分野

精神分析／臨床心理学／医療心理学／教育相談

研究テーマ／主要著書・論文

主な研究テーマは教育相談、自然災害後の心のケア、特にトラウマ（心的外傷）を受けた人の心理支援、交流会支援および被災者の語りの分析、心理職のアウトリーチ活動、精神分析的心理療法などである。臨床心理士・公認心理師・精神分析学会認定心理療法士の資格を持ち、臨床活動もしている。

主な著書は「改訂第三版教育相談の理論と方法」「教育相談の理論と方法小学校編」「教育相談の理論と方法中学校・高校編」（編著玉川大学出版部）、「子どものこころ　大人のこころ　先生と保護者が判断を誤らないための手引き書」「子どものこころ―教室や子育てに役立つカウンセリングの考え方」（共に単著ナカニシヤ出版）、「グローバル化、デジタル化で教育、社会は変わる」（共著東信堂）、「女子大生がカウンセリングを求めるとき」（共著ミネルヴァ書房）他。



教育学

Professor Curtis BEAVERFORD
ビーバーフォード，カーティス ロバート 教授

Master of Education

専攻分野

International Baccalaureate Implementation Models / International Education / Teacher Education / Communities of Practice

国際バカロレア（IB）教育プログラム導入モデル、国際教育、教師教育、学校における実践コミュニティ

研究テーマ／主要著書・論文

Curtis Beaverford has been an international educator since 1997 and involved with the International Baccalaureate since 2000. In addition to many years of teaching and coordinating aspects of the IB Primary Years, Middle Years and Diploma programmes he worked as the IB Regional Manager for the MYP for seven years managing authorization and evaluation processes in the Asia Pacific Region. After working for the IB, he spent two years as the Headmaster of Dili International School in Timor Leste. Curtis has also worked as a global PD contractor for the IB. He recently worked on the design team for a suite of PD products designed for school administrators, and primary and middle school teachers involved in the King Faisal Foundation's role out of IB programmes in Saudi Arabia. From 2015 – 2018 he worked on the design a new MA programme at the University of Tsukuba which met the requirements for the IB Educator Certificates. Current research interests include IB implementation models in state schools and meeting the professional development needs of teachers new to IB Education.

1997年から国際学校の教員として教壇に立ち、2000年からIB教育に関わるようになる。IBの初等教育プログラム、中等教育プログラム、ディプロマプログラムの教員およびコーディネータとしての経験を経て、国際バカロレア機構（IBO）のアジア太平洋地域マネージャーとして7年間多くの学校の認定と評価に携わった。その後、東チモールのディリ・インターナショナルスクールの校長を2年間務める。IBOの契約職員として教員研修も担当。サウジアラビアのファイサル国王財団が手掛けたIB導入事業において教員研修制度の確立に貢献した。2015年から2018年は筑波大学IB教員養成プログラムの立ち上げにも関わった。現在は様々な国の公立学校におけるIB導入モデルの開発と新しくIB教育実践を行う教員の支援が研究テーマである。



教育学

カメダ クインシー 准教授

修士（教育学）

専攻分野

学校リーダーシップ／教師エージェンシー／実践コミュニティ（学習する組織）

研究テーマ／主要著書・論文

教育学（特に教師教育）を専門とし、日本の国際バカロレア（IB）認定校・候補校を対象に、学校が「学習する組織」として機能する在り方を質的に探究している。IBの理念と日本の教育文化の接点に着目し、学校改革や教員の専門性向上に資する研究・実践を展開するとともに、科研費研究として日本における学校リーダーシップの在り方を探究している。とりわけ、教師のエージェンシーや協働的学習コミュニティの形成、学校リーダーシップが学びの共同体をいかに促進するかを主題とし、学校現場に根ざした研究を通じてそのプロセスを明らかにしている。これらを軸にIBの枠組みを活用し、日本の教育実践に資する知見を蓄積している。主な論文に「コラボラティブ・クラフティング」国際バカロレアジェフトンプソン研究賞入選論文集）、「日本の教育現場におけるウェルビーイングの課題」（欧州教育とペダゴジー学会誌）ほか、「Savoir-Faire - Challenges With Leading Learning in IB Authorized Schools in Japan」Generis Publishing（単著）などがある。



教職大学院

◆教職専攻（専門職学位課程）

高度の専門的な能力と優れた資質を有する小学校教員、中学校・高等学校教員の養成

さまざまな情報が錯綜する今日の高度情報化社会は時代や社会を日々変化させています。この変化は学校教育においても同様です。教員の使命も子供たちに知識を教授することに加え、高学歴化した保護者、地域コミュニティーなどからの要求（Demand）に応えることにまで拡大しています。常に変化の伴う今日の教育現場において必要とされるのは、問題意識を抱き、高度な専門的能力および優れた資質を有する"高度専門職業人としての教員"に他なりません。これまで教育界に多くの優れた人材を輩出してきた"教員養成の玉川"では、教育現場の求める教員を養成し、社会のデマンドに応えるため、質の高い小学校・中学校教員（専修）プログラムに加えて、高等学校教員（専修）プログラムを2018年に開設しました。今日の教育現場に現状を把握・分析するための理論と課題解決を推し進めることのできる"School Leadership"を兼ね備えた教員を育成します。

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

高度の専門的知識・技能を背景に、優れた指導力を有する高度の専門職業人としての教員を養成する、という本学教職大学院の設立理念を実現させるために、次に示す資質・能力を備えていることを入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）として定めています。

1. 教職に対する強い情熱や教育者としての使命感、子どもたちの成長・発達についての深い理解、子どもたちに対する愛情や責任感といった資質を有する人。
2. 教員免許を有し、教職に関する基礎的な知識・技能を有している人。
3. 学校現場が抱える今日的課題に対して、他者とともに、積極的に解決を図ろうとする意欲や意志を有する人。
4. 教員として教育活動を行うにあたり、学習指導要領や最新の教育理論・実践を活かし、教育内容や方法を創造的に考えることができる人。
5. 現職教員においては、学校や地域における指導的役割を担えるスクールリーダーになり得る人。学部新卒者においては、学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を修得し、教職大学院での学修を通して、新しい学校づくりの有力な一員となり得る人。
6. 本学の教育理念、本教職大学院の教育目標・内容・方法等を理解した上で入学を希望する人。

以上の資質・能力を、書類選考・小論文・面接によって総合的に判断し、入学者を受け入れます。

修了生Interview　安田学園中学校高等学校 勤務

先生や先輩の姿から、実践の中で研究を続ける大切さを学びました。



教育学研究科
教職専攻
専門職学位課程［教職大学院］
2025年3月修了
佐藤 美由紀 さん

他大学を卒業し、大学院進学を選んだのは、文学教育のあり方をより深く学びたかったから。同時に、早く子どもたちと関わりたいという気持ちもありました。そんな中、教職大学院には学習者の多様なニーズに応える履修課程があり、1年間で修了する「5年プログラム」に魅力を感じ、進学を決めました。実際に、凝縮されたプログラムの中で、明確な研究視点を持って専門実習に臨めることや、1年後には就職するので、大学院で得た学びをすぐに現場で生かせるなど、多くのメリットを感じました。

教職大学院には、研究者教員および校種や教科の異なる実務家教員が揃っています。また、教育委員会や管理職を経た実務家教員の話を聞き、今後のキャリアをより広い視野から考えられるようになりました。学生の経歴も学部新卒、小・中・高等学校の現職教員、社会人など多彩で、先生方や学生との関わりの中で大きな刺激を受けました。すでに教育現場で働いている学生との接点もあり、働きながら研究に取り組まれている姿を見て、実践の中で研究を続ける重要性を知りました。

私にとって教職大学院は、さまざまな教科の共通点や、言葉という視点から子どもたちと関わって学ぶ国語科の魅力、意義を改めて考える機会を得た場所です。研究を通して子どもたちの学びのあり方への理解を深め、研究を続ける土台を培うことができました。

詳細はホームページをご覧ください。
https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/



教職大学院がめざすもの

玉川大学教職大学院においては、既設の教育学研究科や教育学部での実績を基に、高度の専門的な能力と優れた資質を有する小学校・中学校・高等学校教員の養成を行うことをめざします。また、そのための教育・研究を通して地域社会に貢献することを理念とします。なお、本教職大学院では、小・中学校の現職教員をはじめ、学部新卒者、あるいは社会人など、幅広い方々を受け入れる体制が整っており、個々の経験や経歴に応じた多彩な学びを用意しています。
令和４年度からは、これまで小学校教員養成プログラムで展開されてきたコース制を中学校・高等学校教員養成プログラムにも導入しました。
さらに、令和5年度からは、入学前に先取履修を行うことにより、大学院を1年で修了できる「玉川5年プログラム」と2年次の学修の場を小学校・中学校・高等学校を拠点とする教育・連携プログラムを開設しました。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

教職大学院では、本学創立の理念である全人教育の精神、専門職大学院としての教職大学院の設置の目的に基づき、ディプロマ・ポリシーにおける基礎的な能力を育て、高度な専門的な能力および優れた資質を有する高度専門職業人としての小学校・中学校・高等学校教員を養成するために、以下の科目群を設定しています。
いずれの科目においても、教員の立場で即応的に活かされるオーセンティックな学びの達成が重視され、評価がおこなわれます。
令和４年度からは、他学部他学科の科目受講の制度を活用し、IB Certificate in Teaching and Learning（CTL）の取得も可能になりました。

教育学研究科 教職専攻【教職大学院】の概要イメージ図

基本科目群（必修）10科目20単位

- 教育課程編成の研究と実践
- 教員の在り方と資質の向上
- 学校経営の研究と実践
- 学校の社会的役割と教員の服務
- 教育方法の研究と実践
- 授業デザインの研究と実践
- 教科教育の研究と実践
- 学級経営の実践と課題
- 生徒指導と特別活動の実践と課題
- 教育相談と特別支援教育の実践と課題

発展科目群（選択）6科目12単位以上

○印はコースの必須項目

教育経営コース

- ○ 公教育と学校組織
- ○ 学校経営と教育行財政
- ● 教育法規の理論と実践
- ○ 教育課程経営の理論と実践
- ● 学校評価と学校づくり

教育実践・教材開発コース

- ○ 教材開発と授業実践
- ○ 教科学習の研究と実践
- ● 国語科学習デザイン研究
- ● 算数・数学科学習デザイン研究
- ● 外国語活動・英語科学習デザイン研究
- ● 授業技術の研究と実践
- ○ コンピュータと教育
- ● 児童英語の実践
- ● 理科学習デザイン研究
- ● 社会科学習デザイン研究
- ● 美術科学習デザイン研究

指導が難しい子どもへの支援コース

- ○ 特別支援教育の理論と教育
- ○ 特別支援教育と医療
- ● 発達障害の現状と課題
- ○ 教育相談の理論と実践
- ● 発達障害の理論と課題
- ● 学校カウンセリングの技法

心の教育実践コース

- ○ 心の教育と道徳教育
- ○ 生徒指導の理論と実践
- ● 脳科学と教育
- ● ファシリテーターとしての教師の技術と実践 A
- ● ファシリテーターとしての教師の技術と実践 B
- ○ 心の教育実践研究
- ● 道徳授業の研究と実践

総合科目群（選択）

- 教育実践研究（基礎）
- 教育実践研究（応用）
- 学校実践研究

総合科目群（必修）2科目 4単位

- 全人教育の理論と実践
- 学校課題研究

※最終年度に通年で実施

学校における実習（必修）1科目 10単位

- 教職専門実習A（10単位）
- 教職専門実習B（2単位）
- 教職専門実習C（8単位）

※学校現場での実務経験に応じて、10単位または8単位を修得したとみなすことができる。

教員紹介



梅田 比奈子 教授

教育学修士

専攻分野

社会科教育／人権教育／生徒指導

担当科目

生徒指導の理論と実践／授業デザインの研究と実践／社会科学習デザイン研究

経歴

神奈川県生まれ。横浜国立大学教育学部卒業後、横浜市立小学校教諭、主幹教諭として勤務。その間、横浜国立大学大学院教育学研究科で社会科教育を専攻し修了。その後、横浜市立小学校副校長、横浜市教育委員会で指導主事（小中学校教育課、南部学校教育事務所）、主任指導主事（人権教育・児童生徒課）横浜市立小学校長を歴任。この間、法務省法教育推進協議会小学校教材部会構成員、文部科学省学習指導要領実施状況調査（小学校社会）問題作成委員、文部科学省学習指導要領実施状況調査（小学校社会）結果分析委員、文部科学省　学習指導要領等の改善にかかる検討に必要な専門的作業協力者、関東、神奈川県、横浜市それぞれの小学校社会科研究会会長を務めた。

主要著書・論文

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編」（文部科学省）、「法教育推進協議会・小学校教材作成部会作成資料情報化社会を生きる～情報の受け手・送り手として」（法務省）「キー・コンピテンシー」に基づく学習指導法のモデル開発に関する研究ー思考力・判断力・表現力の育成と「言語活動の充実」を図る学習のあり方　市民性教育におけるNIEの有効性　キー・コンピテンシーの育成を目指して」（共著国立教育政策研究所）、「子どもたちにとって、切実性のある人権教育とは～在日韓国・朝鮮人児童と共に生きるために～」（日本社会科教育学会）「法教育の現状と可能性　シチズンリテラシーを考える‥法教育の可能性」（共著：法と心理学会）「社会科におけるダイバーシティに関する授業実践等についての意識調査報告ー学会員に対するアンケート調査を通してー」（共著：日本社会科教育学会）「社会科教育の今を問い、未来を拓く 日本社会科教育学会編」（共著：日本社会科教育学会）社会科を好きになる教育への手立て～混迷を切り開く学力の育成～（共著：黎明書房）「「いじめ」根絶！横浜メソッド」（共著 学研教育みらい）他。



久保田 善彦 教授

博士（学校教育学）

専攻分野

教科教育学／理科教育学／科学教育／教育工学

担当科目

教育方法の研究と実践／コンピュータと教育／理科学習デザイン研究／教育課程の編成の研究と実践／教科教育の研究と実践／授業デザインの研究と実践

経歴

茨城県生まれ。東京学芸大学大学院修士課程修了後、茨城県公立小学校教諭および公立中学校理科教諭として15年あまり勤務。傍ら、上越教育大学大学院修士課程、兵庫教育大学大学院連合大学院博士課程を修了。上越教育大学教職大学院、連合大学院博士課程、宇都宮大学教職大学院で研究教育にあたる。科学概念の変容と授業デザイン、先進技術を利用した教材開発、教科教育全般の授業改善等の研究を行っている。文部科学省ICT活動教育アドバイザー、一般社団法人日本理科教育学会会長。

主要著書・論文

『理科重要用語辞典』（2025 明治図書）、『これからの理科教育はどうあるべきか』（2023 東洋館出版社）、『ICTを活用した小学校デジタル教材アイデア66』（2022　ジダイ社）、『理論と実践をつなぐ理科教育学研究の展開』（2022 東洋館出版社）、『テンプレートでわかる算数・理科のクラウド活用』（2021 東洋館出版社）、『GIGAスクールで実現する新しい学び』（2021 東京書籍）、『これならできる小学校教科でのプログラミング教育』（2018 東京書籍）、「局所的会話を保障した遠隔講義が授業雰囲気に与える影響」（2021 日本教育工学会論文誌）、「月の満ち欠けの学習における空間的視点取得の特徴」（2021 理科教育学研究）、「自分の分身をイメージする」（2020 理科の教育）、「一斉授業において公的発話が私的発話に移行する過程の研究」（2019 臨床教科教育学会誌）、「ユニバーサルデザインを取り入れた理科授業」（2019　理科教育ニュース）など。詳しくは、https://www.kubota-lab.net/をご覧下さい。



小泉 晋一 教授

博士（心理学）

専攻分野

臨床心理学／教育相談／カウンセリング／心理学史

担当科目

教育相談の理論と実践／教育相談と特別支援教育の実践と課題／学校カウンセリングの技法／心の教育実践研究

経歴

京都府生まれ。青山学院大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。青山学院大学文学部教育学科助手、岐阜聖徳学園大学教育学部専任講師・准教授、共栄大学教育学部准教授・教授。この間、青山学院大学、中京大学、文教大学、和洋女子大学、専修大学大学院、埼玉学園大学大学院等の非常勤講師を務める。また公立中学校のスクールカウンセラーや公立高校の巡回相談、NPO法人アスペ・エルデの会のディレクター等を経験。

主要著書・論文

『学校・教育心理学』（共著 建帛社）、『特別の支援を必要とする子どもの理解』（共著 建帛社）、『元良勇次郎著作集 別巻2 元良勇次郎著作集解題』（共著 クレス出版）、『＜変態＞二十面相 ーもうひとつの近代日本精神史』（共著 六花出版）、『楽しい毎日を送るためのスキル ー発達障害のある子のステップアップ・トレーニングー』（共著 日本評論社）、『特別支援教育実践のコツ 発達障害のある子どもの＜苦手＞を＜得意＞にする』（共著 金子書房）、『情動心像の鮮明性に関する実験臨床心理学的研究』（単著 風間書房）。「福来友吉の催眠研究と催眠療法」（単著 催眠学研究）、「アスペルガー障害の青年の怒りと不安のコントロールに対する催眠の適用」（単著 青山心理学研究）、「自閉症スペクトラム障害の子どもと保護者のグループに対するリラクセーション・トレーニングの適用」（単著 共栄大学教育学部紀要）、「入学時のUPI（University Personality Inventory）得点と早期休・退学との関連」（単著 共栄大学研究論集）、「福来友吉の催眠研究に関する文献調査」（単著 催眠学研究）、「発達障害のある子どものためのゆったりとした学校生活づくり」（単著 子どもの心と学校臨床）他。



古島 そのえ 准教授

修士（教育学）

専攻分野

学校経営／教師教育／教育行政／食育／家庭科教育／生活科・総合的学習教育

担当科目

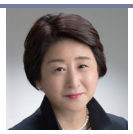
教育課程編成の研究と実践/教員の在り方と資質の向上/授業デザインの研究と実践/学校課題研究/教育実践研究/教職専門実習

経歴

神奈川県生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。神奈川県立特別支援学校教諭、藤沢市立小学校教諭を経て、神奈川県教育委員会支援部子ども教育支援課指導主事、同専任主幹。その後、藤沢市立小学校教頭、校長を経て、神奈川県教育委員会支援部子ども教育支援課長、同支援部長、神奈川県立総合教育センター所長を務める。この間、文部科学省学習指導要領実施状況調査結果分析委員（小学校生活）、同学習指導要領の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者（小学校生活）、同教科用図書検定調査審議会臨時委員などを務める。

主要著書・論文

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編（共著：文部科学省）、小学校学習指導要領ポイント総整理生活（共著：東洋館出版社）、学校栄養教育概論　学校における食の指導（共著：科学同人）、ローティーンのための食育2「健康な体と心」、3「考えよう食事と健康」、4「日本と世界の食の今」（共著：小峰書店）、Let's食育ここがポイント（共著：ケイ・アイ・コーポレーション）、「教育課程編成の指針」、「学びの充実・改善のために」全国学力・学習状況調査結果分析活用資料、「みんながわくわくする学校に～元気な学校づくりのために～」神奈川県児童・生徒の問題行動・不登校等調査結果分析活用資料、「スクールソーシャルワーカー活用ガイドライン」、「小・中学校における政治的教養を育む教育指導資料」等（共著：神奈川県教育委員会）他。



髙岡 麻美 教授

文学士

専攻分野

社会科教育／学校経営／特別活動／特別支援教育

担当科目

生徒指導と特別活動の実践と課題／学校の社会的役割と教員の服務／社会科学習デザイン研究／教育実践研究

経歴

東京都生まれ。東京女子大学文理学部史学科卒業後、東京都公立中学校社会科教諭（3校）・主幹教諭（1校）・副校長（2校）・校長（3校）として、38年間勤務。その後、玉川大学教師教育リサーチセンター教職サポートルーム客員教授を務める。その間、東京都教育研究員（中学校社会科）、東京都研究開発委員会中学校社会科開発委員長、文部科学省高校における特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議委員、全国中学校社会科教育研究会会長、全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長会副会長、東京都中学校長会副会長、消費者教育推進会議委員、北方領土問題対策協会理事などを務める。

主要著書・論文

「小・中学校　管理職のためのよくわかるインクルーシブ教育 Q&A」（共著：開隆堂出版）、「中学校 学級担任のためのよくわかるインクルーシブ教育 Q&A」（共著：開隆堂出版）、「中学校教育課程実践　社会」（共著：ぎょうせい）、「すぐに役立つ教頭・副校長ハンドブック」（共著：教育開発研究所）、「教科専門性をはぐくむ教師教育」（共著：東信堂）、「地域調査学習」の指導法についての実践報告（玉川大学教師教育リサーチセンター年報第12号）、「見方・考え方を鍛える　誰でもできるようになる3D地形の制作・実践ガイド」（共著：集智出版社）、「グローバル時代の教育相談」（共著：ナカニシヤ出版）、他。



髙橋 愛 教授

博士（教育学）

専攻分野

教科教育学（美術科）

担当科目

美術科学習デザイン研究/学校課題研究/学校実践研究

経歴

埼玉県生まれ。東京学芸大学大学院　連合学校教育学研究科修了。短期大学、私立学校、公立学校に数年勤務。その後、玉川大学芸術学部に助教として勤務。現在、芸術学部アート・デザイン学科と兼務担当。

主要著書・論文

『博物館教育論』（共著）、『インターンシップ実践ガイド　大学と企業の連携』（共著）、『教科指導法シリーズ　小学校指導法　図画工作』（共著）、教師用DVD-ROM「お役に立ちMAX」（監修）、『楽しい造形表現：保育者のための基礎と応用』（共著）、「作品と場所の相違が美術鑑賞経験にもたらすものを想起から考える」（共著）、「図画工作科における基礎的な技術能力育成の有用性に関する研究：きりがみを扱った技術指導を中心にして」（博士論文）ほか。



谷 和樹 教授

修士（学校教育学）

専攻分野

授業論／教育技法／学級経営／教材開発／ICT／社会科指導

担当科目

学級経営の実践と課題／授業技術の研究と実践／教材開発と授業実践／教育方法の研究と実践／コンピュータと教育／社会科学習デザイン研究

経歴

北海道札幌市生まれ。神戸大学教育学部初等教育学科卒業。兵庫県加東市立東条西小学校、滝野東小学校、滝野南小学校、米田小学校教諭として22年間勤務する。その間、兵庫教育大学修士課程学校教育研究科において教科領域教育を専攻し修了。

主要著書・論文

「9歳から知っておきたいAIを味方につける方法」(マイクロマガジン社)、「9歳から知っておきたい情報読解力を身につける方法」(マイクロマガジン社)、「9歳から知っておきたいコミュ力・プレゼン力をアップさせる方法」(マイクロマガジン社)、「教師のベーシックスキル7+3(1)(2)」(教育技術研究所)、「みるみる子どもが変化する『プロ教師が使いこなす指導技術』」(学芸みらい社)、「子どもを社会科好きにする授業」(学芸みらい社)、新・授業づくり&学級経営:365日サポートBOOK(全六巻)(学芸みらい社)、「授業で"学び方技能"をどう育てるか－学年別系統化細案」(明治図書)、「3年生の「学習技能」を鍛える」(明治図書)、「谷和樹の学級経営と仕事術」(騒人舎)、「教材研究にこだわる社会科授業の組み立て方」(明治図書)、「社会科教科書プラスワン補充教材集」(明治図書)、「どうすればいいの?研究・研修の悩みQ&A事典」(編著 明治図書)、「小学校の「歴史」を26場面で完全理解」(編著 PHP研究所)、「発達障害のリハビリテーション:多職種アプローチの実際」(共著 医学書院)、「道徳の難問・良問テーマ50=1問選択システム」(明治図書)、「合格する"指導案・学級経営案"のたて方・つくり方」(明治図書)、「めっちゃ楽しい校内研修一模擬授業で手に入る"黄金の指導力"」(共著 学芸みらい社)、「小学校の算数 つまずきのポイントを1日で攻略」(編著 扶桑社)、「小学校の国語　つまずきのポイントを1日で攻略」(編著 扶桑社)、他。



成川 敦子 教授

博士（教育学）

専攻分野

特別支援教育／臨床発達心理学／学校心理学

担当科目

特別支援教育の理論と教育／教育相談と特別支援教育の実践と課題／特別支援教育と医療／特別支援教育研究／発達障害の理論と課題／学校課題研究入門／学校課題研究／学校実践研究／教職専門実習A／教職専門実習B／教職専門実習C

経歴

東京都生まれ。東京理科大学理学部数学科卒業。私立女子高校及び東京都立特別支援学校教諭として35年あまり勤務。傍ら、東京学芸大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻修士課程、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程を修了。臨床発達心理士、学校心理士、ガイダンスカウンセラー、公認心理師。

主要著書・論文

インクルーシブ教育時代における教育評価についてチャート.info 教研出版 No.26 2023、「これからの数学1」(共著:数研出版)、「これからの数学探求ノート1」(共著:数研出版)、「保育学用語辞典」(共著:中央法規出版)、「シリーズ　教室でできる特別支援教育7ー教室で行う特別支援教育のアイデア　続　中学・高等学校編ー」(共著:図書文化社)、「特異的発達障害　診断・治療のためのガイドラインーわかりやすい診断手順と支援の実際ー」(共著:診断と治療社)、「算数困難を伴うLD児における算数的思考の偏りに関する研究ー算数的思考課題の達成順序の基準値に基づく検討ー」(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科「学校教育学研究論集」)、「LD児の論理的思考の特徴に関する研究ー算数文章題による検討ー」(共著:一般社団法人日本LD学会)他。



松田 知子 准教授

文学士（教育学）

専攻分野

学校経営/教育行政/特別支援教育

担当科目

公教育と学校組織/学級経営の実践と課題/学校経営の研究と課題/学校の社会的役割と教員の服務

経歴

東京都生まれ。青山学院大学文学部教育学科卒業。相模原市立小学校教諭として20年の勤務を経て相模原市教育委員会学校教育課指導主事、教職員課副主幹、学校教育課担当課長、学校教育課課長、教育センター所長を歴任。その後、相模原市立作の口小学校校長、中央小学校校長を務める。国立教育政策研究所共同研究員(2006-2008)国立教育政策研究所デジタル調査委員会委員(2010-2013)相模原市小学校長会評価検討委員会委員長(2019)相模原市小学校長会政策部長(2021)相模原市特別支援教育研究会会長(2022)

主要著書・論文

「発達障害のある子どもの理解と支援の手引き」(2017 相模原市教育委員会)「新しい時代の準備」(2018 さがみはら教育第163号)
「特別支援学級・通級指導教室経営ハンドブックすまいる365」(2022　相模原市教育委員会)「校長が行うキャリア教育」(2023 日本教育公務員弘済会教育研究論文)
「新版 たのしい算数」(2023 大日本図書)



山口 圭介 教授

修士（文学）

専攻分野

教育哲学／道徳教育学／インターンシップ

担当科目

心の教育と道徳教育／道徳授業の研究と実践

経歴

神奈川県生まれ。玉川大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程単位取得退学。東北女子短期大学専任講師・助教授、玉川大学教育学部准教授・教授。この間、東北女子大学(現柴田学園大学)、駒沢女子大学などで非常勤講師を務める。日本保育学会課題研究委員会研究協力者、文部科学省幼児教育の改善・充実調査調査研究実行委員などを歴任。現在、日本インターンシップ学会副会長・日本ペスタロッチー・フレーベル学会副会長。

主要著書・論文

『ペスタロッチー・フレーベル事典(共著:玉川大学出版部)、『教職概論』(共著:玉川大学出版部)、『インターンシップ入門』(共著:玉川大学出版部)、「ペスタロッチーの教育思想における「従順」の概念について―『神に対する信仰』から導かれる「従順」の構造と性格―」(単著:日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探究』)、「小原國芳の道徳教育論の性格と今日的意義ー混迷する道徳教育からの脱却を目指してー」(単著:『玉川大学全人教育研究センター年報創刊号』)、「教育分野における就業体験の現状と課題」(単著:『玉川大学教師教育リサーチセンター年報4号』)『新教科「道徳」の理論と実践』(共著:玉川大学出版部)、『西洋教育史』(共著:玉川大学出版部)、「『特別の教科 道徳』の評価に関するー考察ー教師の適正な評価活動のためにー」(単著:玉川大学教育学部『論叢』第17号)、『最新インターンシップーニューノーマル時代のキャリア形成ー』(共著:学文社)他。



西田 太郎 准教授

博士（教育学）

専攻分野

国語教育学／臨床教科教育

担当科目

授業デザインの研究と実践／教科学習の研究と実践／教科教育の研究と実践／国語科学習デザイン研究

経歴

広島県呉市生まれ。東京学芸大学教育学部を卒業後、公立小学校(東京都)に16年勤務、その間に玉川大学教職大学院、日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程で学ぶ。兵庫教育大学大学院に移り、教育実践高度化専攻言語系教科マネジメントコースで研究教育にあたる。文学教育研究、文学教材の教材研究、国語科授業における社会文化的相互作用に着目した読みの交流の研究を中心に行っている。国語科学習デザイン学会代表理事、臨床教科教育学会理事、玉川国語教育研究会顧問。

主要著書・論文

『だから、「子どもの問い」で読みの授業は進まない』(2026明治図書)、『だから、その話し合いで子どもの「読み」は深まらない』(2024明治図書)、『物語の教材研究大全3・4年』(2023明治図書)、『〈問いづくり〉と読みの交流の学習デザイン』(2020 明治図書)、『その問いは、物語の授業をデザインする』(2018 学校図書)、「協同的な読みの負荷による学習者の相互作用」(2019 国語科学習デザイン)、「読みの交流における解釈のリソースの働きに関する検討ー小学校第4学年の実践を通してー」(2019 日本体育大学大学院教育学研究科紀要)、「読みの交流におけるテクストの文脈の明示化に関する検討」(2018　臨床教科教育学会誌)、「読みの交流に深さをもたらすメタ認知の促進」(2018 月刊国語教育研究)、「メタ認知的活動を意図した文学の読みの学習」(2018 国語科教育)他。



脳科学研究科

- 心の科学専攻（修士課程）
- 脳科学専攻（博士課程後期）

新たな心の科学を構築し、次世代のリーダーを育成

脳科学研究科は、全人的な人格の陶冶をその基本として、学術の進展と人類福祉の増進に寄与することを教育研究上の目的にすえ、地球自然環境や社会に生きる人間の心のはたらきを司る知覚や認知や思考（知）、感情（情）、意思（意）などに関する高度な専門的知識の修得を通して、人間理解の学問研究を発展させることを教育理念としています。修士課程の心の科学専攻では、様々な学士課程教育を受けた大学院学生が、多様なバックグラウンドを基盤として、人間の心に関する脳神経科学・心理学分野をはじめ工学など多分野にわたる専門的知識と実践能力を習得させることによって、人間の心についての多面的な理解を幅広い社会の分野で活かしていくことのできる人材を育成します。
また、博士課程後期の脳科学専攻では、修士課程の教育研究分野を高度化し、心のはたらきの基盤となる脳・神経学際研究や脳型計算論研究をとおして神経情報処理原理の理解と計算科学への応用を基盤として、心の発達、社会行動、コミュニケーション、心の哲学などの豊かな知識を統合した新たな心の科学の構築をめざす自立した研究を行うことができる研究者、教育者、技術者を養成します。

心の科学専攻（修士課程）入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

学士課程において、生物学、心理学、情報科学など脳神経科学に密接に関連する科目で十分な基礎知識を有するとともに学術論文の理解と作成に必要となる英語力を有し、高度な専門知識の獲得とそれを応用して独創的な研究に取り組む意欲を持ち、さらには心の科学の発展と社会の要請に寄与する大いなる情熱を持った人物を求めます。

脳科学専攻（博士課程後期）入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

脳科学の各研究領域で必要とされる基礎知識を有するとともに学術論文の理解と作成に必要となる英語力を有し、より高度な専門知識の獲得とそれを応用して独創的な研究に取り組む意欲を持ち、さらには脳科学の発展と社会の要請に寄与する大いなる情熱を持った人物を求めます。

書類審査、筆答試験、口述試験のすべてにおいて、複数名で採点・評価し、合議の上で最終評点を決め、合否判定を行います。

修了生Interview　昭和女子大学 総合情報学部 専任講師

多分野の第一人者が集結した環境で、研究者としての礎を築きました。



脳科学研究科
脳科学専攻（博士課程後期）
2019年3月修了
仁科 国之 さん

脳科学研究科の最大の魅力は、ラボ間の垣根が低く、さまざまな専門分野から集まった先生方から指導を受けられるところです。どの先生も、研究活動や発表について相談すると、真剣に話を聞いてくださり、各専門分野の知見に基づいたディスカッションに展開することもしばしばでした。それぞれの分野の第一人者である先生方とのディスカッションを通じ、研究者としてのタフさ、必要な知識、技術が身につき、研究者としての今の私の基礎を形作ってくれたと思います。また、私が研究する分野の知識を持っていない相手に研究内容を伝えるため、相手にわかりやすく伝える技術が磨かれていきました。

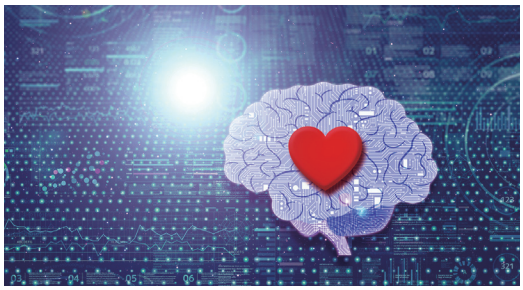
現在は、昭和女子大学で専任講師として研究教育に従事しています。研究面では、web調査や実験でデータを収集して論文執筆を、教育面では、統計学や認知科学といった科学活動に不可欠な知識を学んでもらったり、心理調査法などの授業で実際にデータを取得して、それを分析するといった研究活動を経験してもらう授業を行ったりしています。

現在取り組んでいる研究を発展させていきながら、将来は自分のラボを持つことが目標です。そのために、さまざまな人との共同研究や交流会の企画・運営などを行い、積極的に活動しています。脳科学研究科を目指す人は、先生方の力を大いに借り、自分の糧にして成長してほしいです。

詳細はホームページをご覧ください。https://www.tamagawa.jp/graduate/brain/

心の科学専攻（修士課程）

人間の心の働きを理解するために、脳の情報処理の仕組みを探求する脳情報科学研究、神経ネットワークの物質・形態・機能的な仕組みを探求する神経科学研究、行動とその源となる心理に関する原理を探究する人間科学研究を、社会に活かしていく技術者・教育者・研究者を養成します。



脳科学研究科 心の科学専攻（修士課程）の概要イメージ図

心の科学研究法（必修）

- 心の科学研究法 Ⅰ（研究サーベイ）
- 心の科学研究法 Ⅱ（研究計画）
- 心の科学研究法 Ⅲ（データ解析）
- 心の科学研究法 Ⅳ（論文作成）

心の科学導入科目（必修）

- 心の科学
- 研究者倫理
- Research Presentation
- 心の科学先端セミナー Ⅰ
- 心の科学先端セミナー Ⅱ
- 数理・データサイエンス

心の科学専門科目（選択）

脳情報科学研究プログラム科目

- 脳と機械学習
- 知能発達ロボティクス
- ヒューマン・コンピューター・インタラクション
- システム神経科学

人間科学・神経科学研究プログラム科目

- システム神経科学
- 認知神経科学
- 発達科学基礎論
- アートと社会性の心理学

心の科学関連科目（選択）

- サイエンス・コミュニケーション
- 脳科学インターンシップ

大学院共通科目（選択）

- 全人教育研究
- ELF500
- 多様化社会の中でのSTEM
- 統計
- IB教師教育 各種
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践A
- ファシリテーターとしての教師の技術と実践B

※脳情報科学研究プログラムの修了生には「修士（工学）」
神経科学研究プログラムの修了生には「修士（学術）」
人間科学研究プログラムの修了生には「修士（学術）」

脳科学専攻（博士課程後期）

神経情報処理の仕組みを理解し新たな脳型情報処理の創出をめざす脳型計算論研究と、脳の働きを科学的に探求し人間の持つ豊かな心と社会の理解をめざす脳・神経学際研究を担う、研究者や技術者、教育者を養成します。



脳科学研究科 脳科学専攻（博士課程後期）の概要イメージ図

脳科学研究法（必修）

- 脳科学研究法Ⅰ（研究サーベイ）
- 脳科学研究法Ⅱ（研究計画）
- 脳科学研究法Ⅲ（データ解析）
- 脳科学研究法Ⅳ（論文作成）
- 脳科学研究法セミナー

脳科学導入科目（必修）

- 研究者倫理論
- 脳科学先端セミナーⅠ/Ⅱ

脳科学専門科目（選択）

脳科学方法論

- システム神経科学演習
- 計算論的神経科学
- 脳画像解析学
- 発達科学
- 心理ゲノミクス・バイオマーカー実習
- VR心理学
- ヒューマン・エージェント・インタラクション

脳型計算論研究プログラム科目

- 脳型学習システム
- コミュニケーションロボット工学

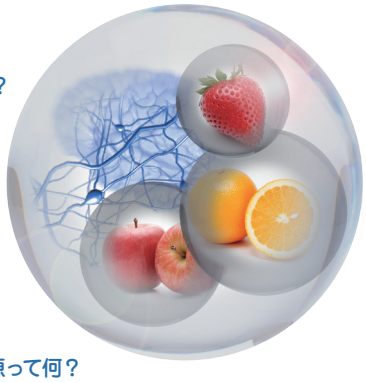
脳・神経学際研究プログラム科目

- 病態神経科学
- 心理物理学

※脳型計算論研究プログラムの修了生には「博士（工学）」
脳・神経学際研究プログラムの修了生には「博士（学術）」

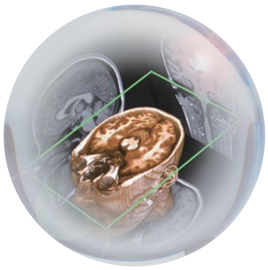
教員紹介

見えるって
どういうこと？



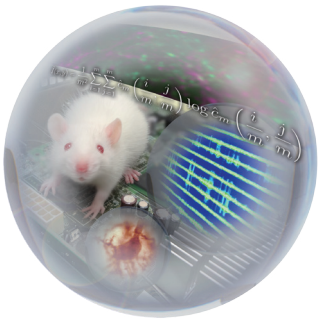


主体性の源って何？

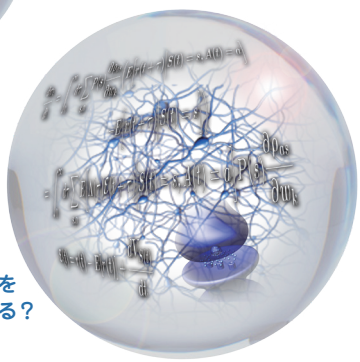


考えているとき、
脳で何が起きている？

意識を生み出している正体は？



心の病の原因は何？



自己と他者を
どう捉えている？

どうやって運動がうまくなる？

身近な疑問からつながる脳の深淵な謎に挑んでいます。



ひらめきの前には
何が起きている？



賢いってどういうこと？

どうやってコミュニケーションが
できるようになる？





友人とうまく付き合える人の脳は
どう違う？





社会はどう形成される？



稲邑 哲也 教授

博士（工学）★★

専門分野

認知ロボティクス／認知科学／感性工学

研究テーマ

日常生活を支援するロボットの実現に向け、人と物理的・言語的なインタラクションを行いながらタスクを遂行する知能の構成法を研究している。人の要求を単に実行するだけでなく、人の潜在能力を引き出し、人が自ら行動しようと思えるような支援方法について、認知科学・感性工学・VR技術の観点からも探求を行っている。

主要業績

●Inamura et al.(2021) Frontiers in Robotics and AI
●Inamura et al.(2021) Advanced Robotics
●Taniguchi et al.(2020) Autonomous Robots



岩田 恵子 教授

博士（学術）☆

専門分野

発達心理学／保育学

研究テーマ

保育の場における子どもたちの学びや育ちを、社会文化的な視点、二人称的アプローチで捉えることを試みている。子どもがモノ・他者と二人称的にかかわりあっている状況や、保育実践において二人称的にかかわりあっている対話的状況を、それぞれの当事者同士の二人称的「応答」に注意を向け、「共感」しつつ、より深く知ろうと研究を行っている。さらに、保育の質向上をめぐる質的研究、研修・実習のあり方の実践研究も行っている。

主要業績

●岩田恵子, 大豆生田啓友 (2019)玉川大学学術研究所紀要.
●岩田恵子編著 (2022)『教えと学びを考える 学習・発達論』玉川大学出版部
●岩田恵子 (2017)第2章「観察する記述」から「感じとる記述」へ：二人称的記述から見えてくる赤ちゃんがケアする世界, 『「子どもがケアする世界」をケアする』佐伯胖(編著)ミネルヴァ書房.



奥村 哲 教授

博士（理学）★

専門分野

神経行動学／産学官連携／神経科学教育

研究テーマ

四足動物の歩行運動や、複雑な歌文法をもつ小鳥の歌行動を可能にする中枢神経機構について、主に神経行動学的な視点から研究してきました。その経験を踏まえ、神経科学・脳科学の知見の社会での活用や、特に高等学校における神経科学教育の展開について、産業界や高校(K-12)のみなさまと広く連携しながら検討し、実践していきます。

主要業績

●Yamashita et al. (2011) *Frontiers in Computational Neuroscience*
●Okumura et al. (2007) *Journal of Visualized Experiments*
●奥村哲　他（2021）日米の高校生物学教科書の比較，日本生物教育学会第106回全国大会要旨集



梶川 祥世 教授

博士（学術）★★

専門分野

実験心理学／発達心理学

研究テーマ

言語獲得の過程とメカニズムを認知発達科学的観点から明らかにするため、乳幼児期の言語音声知覚、語彙獲得と親からの入力の関わりに焦点を当てて、乳幼児の行動実験や母子間相互作用の観察、質問紙調査を中心に研究を行っている。また、言語獲得初期における歌の役割に注目して、言語と音楽の発達の比較や親からの歌いかけ／語りかけの特徴について、音響分析や心拍測定に基づいた検討を行っている。

主要業績

●梶川祥世(2024)小児科診療.
●梶川祥世(2022)第3章ことばとコミュニケーションの発達「教えと学びを考える学習・発達論」岩田恵子(編著)玉川大学出版部
●梶川祥世, 針生悦子 (2016) 認知科学.



酒井 裕 教授
博士（理学）★★

専門分野
神経計算論／数理脳科学

研究テーマ
物理学の視点から生物の脳で起こっている現象のメカニズムとその機能を解明するための研究を行っている。脳は、膨大な知覚情報や記憶の中から、自分の行動を選択するのに重要な情報だけを適切に抽出し、それに応じてより良い結果をもたらす行動が取れるように学習することができる。これはコンピュータではまだ実現できていない能力である。その学習メカニズムの理論的枠組みを神経細胞レベルから構築し、行動レベルの振舞まで理解するという前人未到のテーマに挑んでいる。

主要業績
●Nonomura et al. (2018) *Neuron.*
●Takiyama & Sakai (2016) *Scientific Reports.*
●Yamaguchi & Sakai (2012) *Neural Networks.*



佐々木 哲彦 教授
博士（理学）☆

専門分野
分子生物学／神経生物学／応用昆虫学

研究テーマ
ミツバチは調和のとれた高度な社会的行動をとることができる代表的な社会性昆虫である。ミツバチの複雑かつ精緻な行動が、ヒトの脳の約1万分の1のニューロンからなる微少な脳によって実現されることは驚きに値する。ミツバチなどの節足動物と、脊椎動物が分岐したのは数億年前と推定されているが、脳の基本メカニズムは両者で酷似している。シンプルな構造からなるミツバチ脳の仕組みを分子レベルで解析し、社会行動と脳の発達の関連を明らかにすることをめざしている。

主要業績
●Ugajin et al. (2018) *Insect Molecular Biology.*
●Kohno et al. (2016) *Zoological Science.*
●Ikeda et al. (2011) *Journal of Insect Science.*



佐藤 由紀 教授
博士（学際情報学）★

専門分野
生態心理学／身体論

研究テーマ
芸術表現の意味をミクロとマクロの両方の視点から探っている。ミクロな視点からは、James J. Gibsonという生態心理学者の知覚理論を礎としながら、芸術表現、特に演技から生みだされる情報について、身体を対象に認知科学的手法を中心に検討している。マクロな視点からは、芸術表現が生みだされる日常のイベントである祭礼について、その社会的意味をオーラルヒストリーやインタビューから探っている。

主要業績
●Ishiguro et al. (2020) *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts.*
●佐藤由紀，大堀研(2020) 第14章つながること、つづけること『地域の危機・釜石の対応』東大社研ほか(編)東京大学出版会
●佐藤由紀、渋谷友紀、佐々木正人(2010)認知科学.



鮫島 和行 教授
博士（工学）★★

専門分野
計算神経科学／認知神経科学

研究テーマ
脳を創る工学と、脳を知る生理学を統合した、計算論的神経科学の研究を行っている。人工知能分野のアルゴリズムと、意思決定や報酬を司る大脳基底核や前頭前野の神経活動の関係性を探り、新しい人工知能の形や、社会の中で生きる脳の原理を発見することが目標である。主に、サルの電気生理実験と強化学習の枠組みの理論解析を道具として、神経科学や認知科学における理論と実験の融合を目指している。

主要業績
●Nonomura & Samejima (2019) *Frontiers in Neuroscience.*
●Ueda et. al. (2017) *Frontiers in Neuroanatomy.*
●Samejima et. al. (2005) *Science.*



高岸 治人 教授
博士（文学）★★

専門分野
社会神経科学／社会心理学

研究テーマ
ヒトは他の動物に比べて極めて高い向社会性を示します。なぜヒトの向社会性は高いのでしょうか。高岸研究室では、そのような問題に対して経済ゲームを用いた行動実験、ホルモン解析、MRI解析、遺伝子解析といった様々なアプローチ法を組み合わせ、子どもから成人までの参加者を対象とすることでヒトの向社会性の本性に迫ります。

主要業績
●Ishihara et al. (2025) *eNeuro.*
●Tanaka et al. (2023) *Proc Biol Sci.*
●Tanaka et al. (2023) *Cerebral Cortex.*



武井 智彦 教授
博士（人間・環境学）★★

専門分野
システム神経科学／神経生理学

研究テーマ
我々が普段当たり前のように行っている運動も、実は広範な中枢神経系の協調によって生み出されている。そのため脳の一部が損傷すると運動の巧みさは失われ様々な運動障害が生じてしまう。我々の研究室では、円滑な運動制御がどのような神経メカニズムによって実現し、それが破綻したときどのような運動障害が生じるのかを、神経生理学、計算論的手法、人工神経回路といった学際的な手法によって研究している。

主要業績
●Song et al. (2022) *Front Sys Neurosci*
●Takei et al. (2021) *Current Biology*
●Takei et al. (2017) *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*
●Takei et al. (2010) *Journal of Neuroscience*



田中 康裕 教授
博士（医学）★★

専門分野
神経科学／データサイエンス

研究テーマ
心は世界を感じ、考え、世界に働きかける。これらが実現されるとき、神経細胞の集団としての活動はどのような性質を持つのだろうか。この問いに応えるため、様々な行動の条件下で電気生理あるいはイメージングにより大脳皮質や関連する領域から多細胞記録を取得し、深層学習に代表される人工知能技術や力学系の方法までを駆使して解析している。脳・神経回路の物理的な性質、そこに埋め込まれた情報と、動物個体としての生物学的反応や行動との関係の解明をめざしている。

主要業績
●Tanaka et al. (2018) *Neuron.*
●Masamizu et al. (2014) *Nature Neuroscience.*
●Tanaka et al. (2011) *Journal of Neuroscience.*



松田 哲也 教授
博士（医学）★★

専門分野
認知神経科学／認知心理学

研究テーマ
脳は人により違った使い方をしており、その多様性が人間らしさを生み出していると考えている。MRIによる最先端脳イメージング手法による脳の構造的・機能的ネットワークレベルの解析、認知神経科学的実験を組み合わせ、社会性、意思決定の柔軟性の個人差に関わる神経システムを理解し、個性とは何か?に迫る研究を行っている。

主要業績
●Ishihara et al.(2025) *eNeuro.*
●Kawamoto et al. (2023) *Sci. Rep.*
●Yamada et al. (2012) *Nature Communications.*



松元 健二 教授
博士（理学）★★

専門分野
認知脳科学／神経経済学／システム神経科学

研究テーマ
人間の主体性を脳から解明することを目指して、サル前頭葉の神経細胞活動記録やヒト脳機能イメージングを用いて、目標指向行動や内発的動機づけ、「機会の平等」の価値づけの神経基盤研究を進めてきた。現在は、脳科学と社会科学とをVR技術も活用して融合することで社会の幸福度を高めるムーンショットプロジェクト「脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化」の統括もおこなっている。

主要業績
●Sakaki et al. (2024) *Cogn. Affect. Behav. Neurosci.*
●Yomogida et al. (2017) *Scientific Reports.*
●Murayama et al. (2010) *Proc. Natl. Acad. Sci. USA.*
●Matsumoto et al. (2003) *Science.*



武藤 ゆみ子 准教授
博士（理学）★

専門分野
情報工学／ヒューマンコンピュータインタラクション／データサイエンス・AI教育

研究テーマ
人の特性を考慮し、コンピュータ技術を福祉や教育へ活用する工学設計の研究に従事している。センサを用いて計測し、取得されたデータを分析することにより、人間の感覚や運動などの特性を知り、さらに新たな工学応用へとつなげる。研究指導では、脳科学の基礎教養（特に感覚や運動）を備えつつ、センシングやデータ分析手法を活用して新たな提案を行える人材の育成を目指している。

主要業績
●Muto et al. (2023), Walking Posture Correction Using Mixed Reality for Self Visualization, HCI International
●武藤ゆみ子, 岡田浩之(2021)「AIとうまくつきあう方法」玉川大学出版部
●Muto et al.(2020), Eye-gaze information input based on pupillary response to visual stimulus with luminance modulation, PLOS ONE

大学院進学ガイダンス

玉川大学在学生（全学年の参加も可能）・
既卒者・他大学生等を対象にした説明会です。

◆各研究科の進学ガイダンス

詳細はこちら→



入試日程（全研究科）

Ⅰ期

出願期間	2026年9月4日（金）～9月8日（火）締切日消印有効 窓口受付：2026年9月9日（水）のみ ［受付時間：10:00～15:00］
試験日	2026年9月19日（土）
合格発表日	2026年9月28日（月）
入学手続締切日	2026年10月9日（金）消印有効

Ⅱ期

出願期間	2026年11月13日（金）～11月18日（水）締切日消印有効 窓口受付：2026年11月19日（木）のみ ［受付時間：10:00～15:00］
試験日	2026年12月5日（土）
合格発表日	2026年12月11日（金）
入学手続締切日	2027年1月5日（火）消印有効

Ⅲ期

出願期間	2027年1月13日（水）～1月19日（火）締切日消印有効 窓口受付：2027年1月20日（水）のみ ［受付時間：10:00～15:00］
試験日	2027年2月13日（土）
合格発表日	2027年2月18日（木）
入学手続締切日	2027年2月26日（金）消印有効

入学試験要項および出願書類

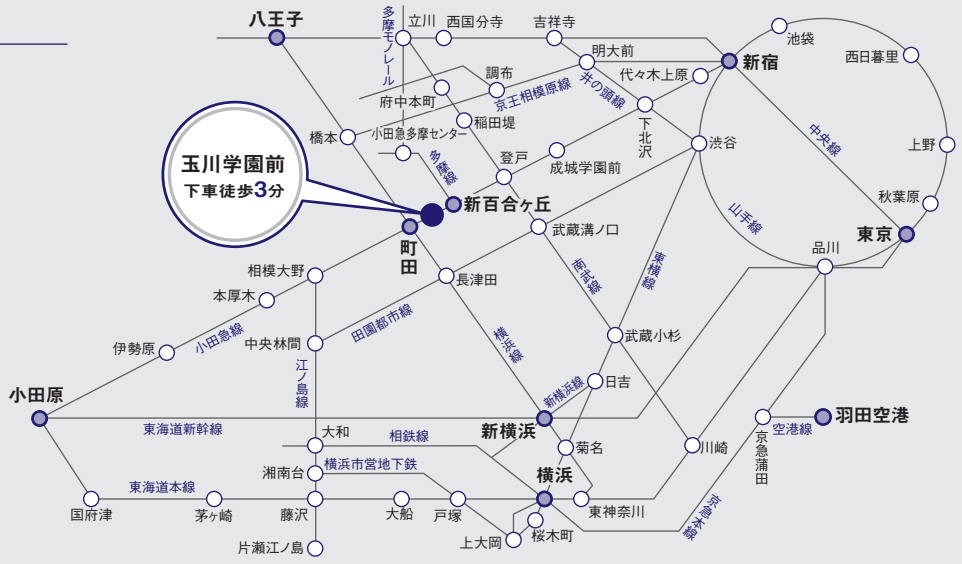
工学研究科・脳科学研究科では、出願前に、指導を希望する教員に連絡の上、研究内容等を相談してください。

ホームページよりダウンロードしてください（7月公開予定）。印刷冊子の配布はしていません。

Access

小田急線「玉川学園前」駅下車

- **新宿**より小田急線の快速急行に乗車し、「新百合ケ丘」で"各停""準急"に乗り換え。
  所要時間 約 **30** 分
- **横浜・八王子**よりJR横浜線に乗車し、「町田」で小田急線"各停""準急""通勤準急"に乗り換え。
  所要時間 約 **45** 分・約 **40** 分
- **羽田空港**より京急空港線に乗車し、「京急蒲田」で京急本線に乗り換え「横浜」へ。JR横浜線に乗り換え「町田」で小田急線"各停""準急""通勤準急"に乗り換え。
  所要時間 約 **90** 分



Information

大学院に関するお問い合わせ

TEL 042-739-8155

MAIL　koho@tamagawa.ac.jp

〒194-8612 東京都町田市玉川学園6-1-1（入試広報部）

土曜・日曜・祝日及び下記の期間は休務となります。
8月22日～8月31日（夏季休暇） 12月24日～1月3日（冬季休暇）
＊その他、学園行事及び入試広報部諸行事で休務となることがあります。ご了承ください。

www.tamagawa.jp/graduate/

※本誌に掲載している情報は、2026年5月時点のものです。内容に変更が生じることがあります。なお、一部内容に取材当時のものを含みます。